
約束の地で会いましょう

天猫 紅楼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束の地で会いましょう

【Nコード】

N8570G

【作者名】

天猫 紅楼

【あらすじ】

スナ国王の娘、フリージアを巡り、運命にもてあそばれる1人の名も無き影が居た。彼女を囲む全ての者は、自分が信じるものの為に生きていた。それは彼女ともう1人の悩める傭兵を苦しめ、そして成長させる。2人は約束の地へと赴く勇気を手に入れられるのか…。

プロローグ

スナ国。

四方を緑に囲まれた小さな国。

二千人ほどの民が住み、争いもなく、細々と心豊かに暮らしていた。

そんな中、どこから不穏な噂が届いた。

スナ国王ジアスの娘：つまり姫にあたる「フリージア」の秘めた力の事。

それは、魔の力とも神の力とも言われた。

「そんなものは根も葉もない只の噂だ。」
と、ジアスは相手にしなかった。

そんな時だった。

隣国 マタイ国から書状が届いたのは……

《 スナ国の王 ジアスに告ぐ。

貴殿の娘、フリージアを頂きに参上する。

その歳 20になる夜、月が真上になる時、

貴国中央にそびえる「カネの塔」最上階に

フリージアひとりで おられるように。

いかなる抗いも認められぬことを、

わが国の名をもって これを伝える。

……マタイ国
》

★★★~~~~★★★~~~~★★★~~~~★★★

姫フリージアを守るため、城内部ではある計画が立てられていた。

影武者：つまり、似た人物を姫に見立て、本人を守るというものの。

もちろん影武者には護衛が付く。

本人さながらの扱いを受けるのだ。

護衛に付くのは皆、国内屈指の猛者たちである。

ランス★ 剣使いとしての実力もさることながら、真面目な性格から、リーダーとして今回の使命を取り仕切る。

セン★ 大人しい性格のように見えるが、動物を使つての戦術には目を見張る実力を持っている。

キホク★ 剣使い。あまり人との交流を好まず、いつも少し距離を置いている印象があるが、いざ戦いの場になると抜群のチームワークを見せる。

他にザディ、グレンら、国王が自ら指名した屈指の猛者たち。

皆、己の使命を全うするべく気持ちを固めていた。

そして彼ら護衛達には、影武者の事を伏せていた。

このことを知っているのは、国王ジアスとその側近、そして王妃ラビリス、フリージアのみだった。

影武者

「ヨミ！まだなのか！！」

国王ジアスの凜とした声が、部屋に響いた。

ヨミと呼ばれた男：真っ直ぐな黒髪を背まで伸ばし、白いマントに身を包む、静かな佇まいの人物。

彼は側近という役を任されていた。

ジアスは彼に絶対の信頼を寄せていた。

その側近は、ジアスの前にひざまずいていた。

「…もう間もなくかと。今しがた、こちらへ向かっていると使いの者からの伝鳥が届きましてございます。」

「手こずっているのか？やむをえん…これは内密の計画でもある。誰にも知られてはならぬのだ…。」

立派な髭を震わせ、焦りにも似た声を発し、ジアスは窓の外を憎らしげに見つめた。

「平和な日々というものは、たやすく崩れるものなのか…」

ヨミは黙ったまま、そこにひざまずいていた。

そのころ、姫 フリージアは身に迫る危機に気づいていた。

しかし自分ひとりではどうすることも出来ないのも知っていた。

全ては父である国王の判断と決断に委ねるのみ。

今はただ言われるがまま、用意された部屋に居ることしか出来なかった。

フリージアの母…つまりスナの国の王妃は、最近になって体調を崩し床に伏せていた。もとも

と身体が強い人ではなかったが、この計画が実行されるのを聞いてますます具合が悪くなっていた。

「とうとう…この日が来てしまったのね…」

うわごとのようにつぶやいて……

「国王。着いたようです。」

ヨミの静かな声が、ジアスを突き刺した。

「そうか。すぐに通せ。」

ジアスの顔が、緊張したように少しこわばった。

使いの者に付き添われ、頭まですっぽりと黒いフードに包まれた人物がジアスの前へ歩み寄った。

「顔を上げよ。」

ジアスが先程までの慌しさも見せず、抑揚無く言った。

その言葉に、その人物はゆっくりとフードを取った。

その姿はまさしく、姫 フリージアと瓜二つだった。

背も、目鼻立ちも、まるでフリージアがそこに居るかのようだった。

そばに立つヨミにも、その顔に驚きと戸惑いが浮かんた。

「よし、お前はたった今から『フリージア』だ。」

ジアスの命に『フリージア』は無言でうなづいた。

「フリージアが20を迎える日まで、まだ間がある。それまでに、フリージアの事を学んでおくがよい。ヨミを付ける。」

ジアスの言葉に、『フリージア』は首を横に振った。

「その必要はありません。」

ジアスは少し驚いた表情をしたが、すぐに言った。

「よからう。」

その顔にはうつすらと満足そうな笑みが浮かんでいた。
そして、ランスら呼んだ。

「私たちがこの命に代えてもあなたをお守りします。」

ランスは仲間を従え、『フリージア』に言った。

彼らは、彼女が影だとは夢にも思っていなかった。その立ち振る舞いは、既に姫　フリージアだった。

「そう。」

『フリージア』はそれだけ言って、窓の外を見た。

その瞳には何の動揺も無いように見られた。自分の命が狙われているのにも関わらず、彼女は静かに佇んでいた。

良い風に言えば、冷静というところか…。

ランスたちは、さすが一国の王女だと結論付けることにした。

『フリージア』の寝室。

外にはランス達が護衛の為に張り込んでいた。

室内にはキホクがドア付近に居た。

「あなたが眠るまでここに居させていただきます。」

『フリージア』は答えず、窓の外の護衛を確認すると静かにカーテンを閉め、床に入った。

「ひとつ、聞かせていただだけませんか？」

キホクが言うと、

「何？」

と面倒くさそうに答えた。

「姫、あなたには生きる気力があるのですか？」

『フリージア』は顔を上げると、キホクを少しにらんだ。

「どういう意味？」

「あなたから、生きたいという気力が感じられません。そのあなたの命を守る任務を負わされた事を思うと…」

キホクは言ってしまったから しまった！ と思った。思わず口から出たとはいえ、ただの護衛くんだりと言える立場ではなかった。

しかし彼女から返ってきた答えは意外なものだった。
「…そうね。」

抑揚の無い声で言うと、布団の中に潜り込んだ。

キホクからしてみれば、ホッとしたような拍子抜けしたような…そんな複雑な気持ちのまま、そつと部屋を後にした。

カネの塔

20歳：本来なら祝福されるべき日に、こんなにも暗く迎えることを誰が予想したのだろうか…。

朝 まだ陽も昇らないうちから、城の内部はぴりぴりした空気に包まれていた。

カネの塔は細長く高い建物で、毎日の時報を伝える為に建てられたものだった。

その為、内部は狭い螺旋階段があるのみ。

明らかに戦闘が出来る場所ではなかった。

マタイ国はそこに付け込んで、空から穏便に姫を頂こうと思っているのだろう。

マタイ国。

飛行術に長けた国である。

それに比べ、飛行術を持たないスナ国にとって、地上を通らずしてカネの塔最上階へ侵入されれば、成す術がないのも同然。

今まで黒煙と悪臭が伴う飛行術を敬遠して、あえて交流を深めなかったツケが回って来たのだと、一部の民が囁いた。

だがしかし、このまま指をくわえてただ姫がさらわれるのを見ているだけで居られるわけもなく、ランス達に全てを託す国民たちであった。

スナ国に避難勧告が出された。出来うる限り、民に傷を負わせたくない国王のせめてもの手段だった。

フリージア姫本人もまた、自分の影武者の無事を祈っていた。

★★★

月が真上に差し掛かった。

雲が時折流れる、とても美しい夜だった。

『フリージア』は黙ったまま、ひとり カネの塔最上階の小部屋に用意された椅子に座っていた。気品漂う顔に、雲の影が流れていた。

やがて、どこからとも無くカラスの鳴き声が聞こえたような気がした。かと思うと、遠くの空に黒い点が生まれた。

そしてそれは次第に大きくなり、形を現してきた。飛行船である。

彼女はそれでも真っ直ぐに「それ」を見据えていた。

マタイ国の飛行船は、ゴウンゴウンという轟音と共にゆっくりとカネの塔へ近づいた。

やがて黒煙が塔を包み込んだ。

その爆風に髪をはためかせ、ゆっくりと立ち上がった『フリージア』の前に飛行船の扉が開き、中から1人の男が姿を現した。

「お迎えに上がりましたよ、お姫様。」

勝ち誇った表情で、その男は手を差し伸べた。

「名を名乗りなさい。」

『フリージア』は毅然とした態度で言った。

男は少し驚いたが、すぐに申し訳なさそうに、

「それはそれは、大変失礼いたしました。私はマタイ国の王スザクの側近、レイユと申します。フリージア姫、あなたをマタイ王のもとへお連れするため、ここに参上した次第でございます。」

「何のために？」

「それは、あなたとスザクの息子ライを結びつける為でございます。」

レイユはずっと微笑んでいた。

「私は、あなた達の思惑に従うつもりはありません。このままお引

取りください。」

『フリージア』はレイユから目を離さなかった。

レイユはそれでも

「そういうわけには行きません。これはスザクの命。マタイの国のために、どうしてもあなたを連れて帰らなくてはなりません。」

「そのようなこと、私たちには関係の無いこと。森の中で鹿でもお捕りになって、それを土産にお帰りになったら？」

レイユの顔がこわばった。

「それでは、力づくでも！」

レイユの合図で、飛行船の中から何十人という兵士がカネの塔へと侵入した。さらってでも姫を連れて来いとの命なのだろう。

その中の1人が『フリージア』の腕を今にも掴もうとしたその時、待機していたランスたちが飛び出してきた。

「俺たちが居るのを知ってか知らずか！」

ランスは狭い小部屋にも関わらず、得意の剣を振り回して兵士を蹴散らした。センやキホクたちも応戦し、『フリージア』は彼らに守られるようにその背に隠れていた。

マタイ国の兵士も戦い慣れしているようで、ランスたちを手こずらせた。それでもランスたちは必死で兵士を迎え撃った。

死闘

どれ位の時間が経っただろうか？

キホクのナイフの切っ先が、レイユの頬をかすめた。

「！！」

レイユが固まった。

「引け！」

キホクの言葉に、レイユは苦しそうに息を吐いた。

「おのれ：見ている。必ずまた来る！！」

レイユは兵士を引き上げさせると、自らも船に乗り込んだ。

まだ追おうとするランスを押さえるセンたちを残し、船はカネの塔：そしてスナ国から撤退した。

カネの塔の黒煙が晴れ、飛行船も空の黒点となった頃、息を呑んで遠くから見ていた国民達は、大歓声を上げた。

安堵の表情をいっばいに。

城から見守っていたジアスもホッと息をついていた。

★★★

無傷ではなかった。スナ国からは死人こそ出なかったものの、ランスもセンたちもそれぞれに傷を負い、マタイの兵士の屍と血だまりが広がるカネの塔の最上階は惨いものだった。

『フリージア』の薄水色のドレスにもいくつもの飛び血がかかっていた。彼女はただ、じっとそのさまを見つめていた。

コンコン……ガチャ☆

騒ぎが落ち着き、部屋で休む『フリージア』のもとに、ランス

達が訪れた。

「このたびは、姫に傷や怪我を負わすことなく任務を遂行出来ましたこと、先ほど国王よりお褒めの言葉を受けて参りました。しかし姫様の護衛はこれで終わったわけではありません。これから、我が命に代えても姫をお守りすることを誓いに参りました。」

その言葉を発する身体には、あちこちを包帯などで処置されていた。

『フリージア』の表情にも、事件前に比べ少し変化があったように、冷たい表情にだいぶ赤みが差していた。

「その傷は、私の心にしっかりと刻んでおきましょう。…キホクは居ないのですか？」

ランス達は顔を見合わせた。そして、センが言った。

「姫様…キホクは…」

数分後、『フリージア』は別棟に居た。

キホクの傷はそれほど深くは無いが、『フリージア』に顔を合わせたくないとのセンの言葉に、彼女はキホクに会わずにいらなかった。

『フリージア』は、キホクに言わなくてはならないことがあった。

『フリージア』の告白

「キホク…」

椅子に座って外を見ていたキホクは、姫直々の訪問に驚きを隠せず、驚いて立ち上がった。

「どうしてここに？」

『フリージア』は無表情を装いながらも、その瞳には何か揺らめくものが映っていた。

「私、あなたに言わなくてはならないことがあるの。…ごめんなさい。」

「何故、謝るのですか？」

キホクは動揺していた。

「あなた、この前言ったわよね？ 『お前には生きたいという気力が感じられない』と。…そう、私はここに来たとき、死んでも良いと思っていた。でもあなたたちは、こんな私を守る為に命を掛けていた。こんな矛盾ってないわ…。」

「ちょっと待ってください。『ここに来たとき』って…どういう意味ですか？」

「私は…」

『フリージア』は戸惑った様子をみせたが、意を決したように口を開いた。

「私は、影武者なの。」

キホクは耳を疑った。

「なんだって？ あなたは姫じゃないのか？？」

「そう。私はフリージアじゃない。」

キホクは目をも疑った。

「だってその姿は…！」

そう、目の前の彼女はまさに、フリージア姫そのものなのだ。

幼いときからスナ国内で武術を学んでいたキホクは、御前試合の際に姫の姿も度々目にしていた。

ランスたちも然りである。

それが騙されるほど似ている目の前の人物に、キホクは動揺を隠せなかった。

そして、自分達を欺いていた国王達にも怒りが生まれていた。

「いつからだ？」

キホクの声に力が入った。

「いつから 姫と入れ替わっていた？」

「マタイから書状が送られてしばらくしてからよ。」

「えっ？ それじゃあ、ついこの間じゃないか？」

「そうよ。」

こんなに似ている人が、世の中に居たのか…。

キホクは影武者『フリージア』の顔をじっと見ずにいられなかった。

「この事は、ランス達も知っているのか？」

「いいえ。私が人に話したのは、あなたが初めて。」

「何故俺に？」

「…言わなくてはいけない気がしたの…。 何故かあなたにだけは…」

『フリージア』本人にも、何故こんな気持ちになったのか分からなかった。

キホクはやっと事の重大さを受け止め、落ち着き始めていた。

「本当の名は？」

キホクは聞いた。

「私は『フリージア』…」

「そんな事を聞いているんじゃないくて、君の本当の名前だ。」

「……………」

彼女は困った顔をして、そして悲しげに微笑んだ。

「無いわ。」

「無いって…？ 名前が無いだって？ そんなバカな！」
「本当よ。私は『フリージア』として生きてきたの。」
「そんな…」

キホクは愕然とした。

『フリージア』がキホクに言った事は、2人だけの秘密だった。
本当は誰にも知られてはならないことだった。

だからキホクには今まで通り、姫としての応対をするように頼んだ。キホクにとっても、今はそうした方が良いというのは分かっていた。仲間を裏切るようで心の底では辛かったが…。

そしてもうひとつ、彼女はキホクに頼みごとをした。

名も無き幼少期

「ほら！ もっと腹に力入れて！！」

「はい！」 バシッ☆

「違う！ こうだよ！」

「はいっ！！」 バシィッ★

木々の間に、キホクと『フリージア』の声と、何かがぶつかり合う音が響いている。

『フリージア』はキホクに武術を習うことにしたのだ。

「なかなか付いてくるけど、大丈夫か？」

「平気よ。自分の身を自分で守るのも大切だと分かってるもの。」

それでも、本物のフリージアよりは強いつもりよ。」

彼女は、城に来て初めてニッコリと笑ってみせた。そしてそれもまた、フリージアとそっくりなのだった。

「基本的な事は、備わっているみたいだな。」

少し汗を流しながらキホクが言くと、

「習ってたから。」

『フリージア』はそれよりももっと汗をかきながら答えた。

「習ってた？」

体を休ませながら、キホクは尋ねた。

「そうよ。 習ってたの。 小さい頃、10年位ね。」

彼女はキホクに並んで切り株に座ると、水を美味しそうに飲んだ。そして、思い出するように話し始めた。

☆☆☆

「私は覚えていないけど、多分物心付いたときには親から離れて、

武術家の師範と2人で森の中で暮らしていたの。師範は：ハイムと言ったわ。体力も大事だけど、心も鍛えてくれた人。姫の影武者として、城の中で育てられる事も考えたとは思うけど、結局ハイムが外へ連れ出したみたい。」

「ハイムの名は聞いたことがある。俺たちの師グイラムの恩師だったらしい。相当な武術家らしいが、：今ハイムはどこに？」

すると『フリージア』の表情が曇った。

「死んだわ…」

「…」

「私が15の時、迷い込んできた山賊にね。あれほどの武術家でも、13人の男達には敵わなかった。私は、隠れてハイムがいたぶられるのを見ているしかなかったの。：それからしばらくは、全てを恨んだわ。私自身の宿命も。」

『フリージア』はこらえ切れなくなったように立ち上がり、再び体を動かし始めた。

「ハイムを殺したようなもの：私は何故生まれてきたのか、疑問で：迎えに来られた時も：本当に来るとも思ってたから驚いたけど：、従うべきかどうか迷ったわ。でも吹っ切れたみたい。」

ホウウツと息をついて、キホクを振り向いた。

「何故？」

「さあ。」

『フリージア』はそれだけ言うと、体を動かし始めた。

レイユ 来城

その日は、程なくして訪れた。

今回の訪問は、地上を通っての来城だった。

マタイ国レイユは馬隊を引き連れ、20人余りの軍隊での来城。重々しい空気に包まれ、レイユは堂々と門を叩いた。

大広間では国王スザクを上座に、ランスを含めた家来を両脇に従え、『フリージア』も国王の傍にヨミと共に居た。

一触即発、臨戦態勢だった。

レイユは部下を城の外に待たせ、ひとり堂々と奥へと歩み入り、ジラスと向かい合った。

ジラスは丁寧にひざまずくレイユを見下ろし、口を開いた。

「マタイ国の使いと聞く。 本日は何用か？」

レイユはうやうやしく一礼をすると答えた。

「私はマタイ国王スザクの側近、レイユと申します。 先日は大変失礼な訪問をし、多大なる迷惑を掛けたことをわびに参りました。」
ランス達は、いかにも余裕を溢れさせているレイユの姿に気が気ではなかった。

「そうか。 先日カネの塔での騒ぎを起こしたのはお前だったか。」

「はい。 本日は改めて、フリージア姫を頂きに参りました。」

「何だと!？」

国王は顔をしかめた。

レイユは薄ら笑いを浮かべて立ち上がった。 部屋の外に何人かを待たせてあるとはいえ、今この大広間にはレイユ1人である。

何故コレほどまでに勝ち誇っていられるのか？

ランス達は剣に手を掛けた。

「理由を聞かせなさい。」

『フリージア』が口を開いた。

「何故それほどまでに、私をマタイへ連れて行きたいのか。王子との婚姻という理由だけではないのでしょうか？」

「フリージア姫。あなたがそこまで毅然としていられるのは、やはり姫としての立場であるからでしょうか？ それとも、他に何か？」
「どういう意味だ!？」

国王が苛立ちをあらわにした。

「国王。マタイでは…いえ、この国にも伝え聞いているかもしれませんが、ある噂が広まっております。」

「噂だと？」

国王の脳裏に、『秘めた力』の噂がよぎった。

「スナ国には、宝があると。」

「宝？」

「それも、何百年かに1人。気の遠くなるような隔世遺伝とでももうしましょうか…」

「はっきりと申せ、レイユ！」

「父さま！」

『フリージア』が、立ち上がろうとする王をなだめた。

「その者との子は、国をも揺るがす魔の力の使い手となるであろう。」

国王の顔がこわばった。これを見透かすように、レイユは微笑みながら続けた。

「先日ご覧に成った通り、マタイには飛行の術を備えております。それに加え、武器の開発も進んでおります。それも、広大な土地、資源、技術、それを操る科学者が豊富なゆえ。スナ国は、見たところとてもどこかで平和な国。そんな国に魔の力が生まれでもしたら、誰が抑え、国の平和を守る事が出来るでしょうか？ マタイと提携すれば、その心配ありません。その代わり、マタイの技術をスナ国にも広め、お互いの平和、そして豊かさも保障されます。」

国王は必死で怒りを抑えるように体を震わせた。

「その自信たっぷりなマタイが、何故地上から来たのだ？」

「それは…」

レイユが腰の短剣に付いた鈴をチリンと鳴らした。

「我らマタイも地上戦が得意であると…」 チリン：

「知らしめるため！！」 チリン★

3回目の鈴の音と同時に、マタイの軍隊が扉を破壊して侵入した。

「！！ どうしたというのだ！ 城内の兵は！？」

国王が戸惑いつつ立ち上がった。 ランス達も一気に身構えた。城内のスナ国の兵士達は既に、マタイの兵によって床に転がされていた。一気に不意打ちを食らっていたのだ。

「ハハハハハハ！！！！！！！！！！」

レイユの笑い声が天井の高い大広間に響いた。

「どうだ！？ この前カネの塔で、おとなしくフリージアを渡せば、ここまでの被害にはならなかったのになぁ！！」

マタイ軍が国王に迫り、ランス達がそれを蹴散らした。

「ワハハ！ この前は意外に狭い場所だったゆえに不覚を喫したが、今回はそうはいかん。」

レイユは余裕で、戦う兵士たちの間を縫い『フリージア』へと近づいた。

「レイユ！ 兵を静めて！！」

『フリージア』はレイユに命令するように言った。

「こういうことですかね、フリージア姫？」

そう言うレイユの笑みの後ろでは、兵同士の戦いが続いている。

「マタイへ行きます！」

動じず『フリージア』は答えた。

「！ だめだ！！」

キホクが驚いて声を上げたが、『フリージア』は無視してレイユをじっと見据えた。決意は固かった。

「そうですか。」

レイユは口角を上げっぱなしで彼女の腕を掴んだ。

「引くぞ！」

レイユの一声で、マタイの兵士たちは早々と退却し始めた。

追っているランス達。だが、姫が人質となってしまった以上、むやみに手が出せない。

その時、奥の間より姿を現した人影。

「姉さん…」

それは『本物の』フリージア姫だった。その小さくつぶやいた声を、キホクは聞き逃さなかった。

マタイの思惑

「さあ、姫様。こちらへ。」

『フリージア』はおとなしくレイユの後をついて歩いた。

マタイの城は、スナのそれとは比べ物にならないほど大きく広く、所々に機械仕掛けのカラクリもあり、重層感にあふれていた。

『フリージア』は謁見の間に通された。

そこには既に国王スザク、その横に王子ライが待っていた。

2人ともガタイが良く、大きいはずの椅子が小さく見えた。

黒々と蓄えた黒髭が、身体をより一層たくましく見せていた。

国王は和んだ表情で『フリージア』を見下すと、低い声で言い始めた。

「我はマタイ国王スザク。手荒な真似をして申し訳なかった。

だが、お互いの国のためだ。フリージア姫。主も自分の国に犠牲を増やしたくないであろう?」

『フリージア』は黙って王を見据えていた。

スザクはその態度に満足気に笑みを浮かべると、話を進めた。

「まことに気品のある方だ。紹介しよう。息子ライだ。」

「初めまして、フリージア姫。これから長い付き合いになるでしょう。よろしく。」

隣に座るライが父に似た満足げな笑顔で言ったが、『フリージア』は毅然とした態度を崩さなかった。

「あなた方は、国を司る責任ある者でありながら、他国の根拠の無い噂を信じて、国を動かそうとしているのですね?」

「その噂というのも、マタイだけでなく他の国々でも広まっているようですぞ。その力を巡って国同士が争うことになる前に、私たちだけで治める。丁度、お互いよい齡ではないか?」

「もし、その噂が嘘だったら?」
「フン。」

スザクは鼻で笑った。ライも微動だにしなかった。

そんな余裕を見せるマタイ国王たちに心底嫌気が差しながら、続けた。

「少し考えれば分かることよ。あなた方は、心無い旅人や商人たちによって流されたデマに踊らされているだけ。結局噂はデマだと分かれば、この国も崩壊へと向かうだけよ。それでもあなた方は計画を遂行するのかしら？」

「それでも良いのだ。」

スザクはまだ薄ら笑っていた。

「もし魔の力が生まれなくとも、この国はこれからも繁栄する。噂話はそのきっかけに過ぎん。」

『フリージア』は呆れていた。もうこの人たちに何を言っても聞き入れてはくれないのか…

そんな彼女にライが近づくと、その腕を掴んだ。かと思うと軽々と肩へと抱き上げた。

「！！ 何をするの！！？」

抗おうとするも、ライはびくともしなかった。

「下ろしなさい！！」

ライは微笑みながら大広間から出ようとすると、歩を進めた。

「まあ、あきらめな。」

余裕で歩く肩の上で、彼女は懸命に暴れていた。

★★★

ドサッ！

『フリージア』はライの部屋のソファに投げ下ろされた。

「結構な扱いね！」

声を荒げると、ライは少し驚いたように言った。

「おお、すまん。女の扱いに慣れていないのだ。」

「常識よ！」

『フリージア』はふてくされた表情でソファに座りなおし、足を組んだ。

ライは気にしない様子でその横に座り、ワインをグラスに注いだ。そのグラスを『フリージア』に手渡すと、自分もグラスを持った。

「まあ、これから長い付き合いになるんだし、お互い仲良くやろう。」

そう言うのと、彼女のグラスに自分のそれを当てた。

チン★

「噂が嘘でも良いと言っていたわね？」

『フリージア』は口を付ける事無く話し始めた。

「ああ、言ったよ。」

ライはグイッと一気に飲み干すと、気持ちよさそうに息を吐いた。

「ウソだからな。」

「何ですって？」

『フリージア』は耳を疑った。

「金があれば何でも出来るってことさ。」

「あなたがやったのね？」

「さあ？」

ライは嬉しそうに笑った。明らかに何か含んでいる笑いだった。「ま、どっちでもいいさ。実は、欲しいものがあってな。」

ライは豪快ににやついた。

「スナ国の地下には、我らマタイの飛行術に必要なものが埋まっているのさ。それが何だか分かるか？ 燃料さ。飛行船を動かすにはエネルギーが要る。そのエネルギーのものが、スナ国の地下にたんまりと埋まっている。」

「そんな…じゃあスナ国はどうなるの？」

「何も滅亡させたり城を壊すつもりはない。お互いに潤う事にな

る。不都合なことなど無いはずだ。しかし何故スナ国は、マタイのこの強大な力を拒むのか……」

ライは2杯目のグラスも飲み干し、『フリージア』の身体を舐めるように見た。

「ま、もうひとつ欲しかったものは手に入れたし。満足だ。これからが、楽しみだな。」

彼女は激しい嫌悪感に襲われた。

「あなたの思惑通りにはならないわよ！」

ライは意に介さず、と言った風に鼻で笑った。

救出、そして…

その時だった。

城の外がにわかに騒がしくなった。

ライは窓から外の様子を見た。『フリージア』もその後についた。

「みんな！」

驚く『フリージア』の言葉に、ライは怪訝な顔をした。

「護衛か？ 追ってきたのか。」

窓の下では、ランスを先頭にセンやキホクらが果敢にも戦っていた。『フリージア』の脳裏に、カネの塔での出来事が蘇った。

傷だらけになっても自分を守った彼ら…

「フハハハハハ！！！！ 無駄なことを！ マタイの軍の強さをまだ分からぬのか。」

そう…勢いではいえ、『フリージア』を追ってきたのはごく小数。マタイにはまだ、多数の軍隊がいる。かなうわけがない。

『フリージア』は扉に駆け寄り、部屋から脱出しようと試みた。しかし、扉は頑丈な鍵が掛けられていた。

バンッ！！

『フリージア』の肩越しに、ライの手が扉を叩いた。

「無駄だよ。 マタイに入ったからには、姫もあいつらも出られない。」

ライは勝ち誇ったように笑った。

それならば！ と今度はライの脇をすり抜け、窓へと走った。そしてバンッ！！と窓を開け放った。

それにいち早く気づいたキホク。

見上げると地上3階の一室から『フリージア』が身を乗り出していた。

「姫！！」

背後からライが捕らえようと掴みかかった。

が、たくみにライの腕からすり抜けると、窓の手すりに足を掛けた。

「まさか？ 飛び降りる気かよ!？」

気づいたランスが驚いて声を上げた。

その予想通り、『フリージア』は躊躇無く身体を宙へ舞わせた。
「! 姫!！」

護衛一同青ざめた。

それを横目に、彼女は傍に植えられた木々の枝をくるくると伝い、姫を迎えに来たランス達の目の前に無傷で降り立ったのである。
驚きの余り言葉が出ないランス達を目覚めさせるに、多くの時間には要らなかった。

再びマタイの兵が襲い掛かってきたのである。

その動きを止めたのは、地上3階からの怒号にも似たライの声だった。

「待て!! 姫にキズを付けるな! 俺が行くまで逃がすな!!」

何とも難しい命令に戸惑う兵たち。

その僅かな間を突いて、動物使いセンが指笛を吹いた。

ピーーーーーッ!!!!!!

するとすぐに、遠くのほうから大きな羽根の羽ばたく音が聞こえてきた。動揺する兵たちの前に現れたのは、人の何倍もあるかのような驚2羽だった。

驚いて逃げ出す兵たちを蹴散らすようにランス達の前に降り立つと、頭を垂れた。

センは右手を高々と上げた。

「チラン、ツシロ、ありがとう!」

にっこりと微笑むセンの後ろには、驚きの顔を浮かべるランス、キホク、『フリージア』たちの姿があった。

ランスはやつと一言を発した。

「お前、すげー必殺技持ってんな…」

「そんな事より！ さ、乗って！！」

「え？ 乗るの？」

有無を言わず、センに促されるまま、ランス達は二手に分かれて乗ることになった。

★★★

センとランスの乗るチランを前に、後ろからキホクと『フリージア』の乗るツシロ。

小さくなっていくマタイを振り返りながら、ランスはセンに尋ねた。

「なあ：コイツら、何？」

少し戸惑いながらなでるランス。がっしりした体には、びっしりと立派な羽根が敷き詰められていた。手触りは悪くない。

「チランとツシロ。ボクが育てた大鷲の夫婦だよ。最近やっと、遠くから呼べるようになったんだ。」

「知らない間に…… 結構やるな、お前。」

ニコニコと微笑むセン。ポンポンと首をやさしく叩くと、チランは嬉しそうに一声上げた。

その後ろからぴたりと追うツシロ。

「セン、やるな。それに結構乗り心地も良いし。：？」

キホクは、自分の背にしがみ付く『フリージア』が少し震えている事に気づいた。

「どうした？ もしかして、高いところが怖いのか？」

「：違う。」

「だろうな。3階から飛び降りてくる奴だもんな。」

「：ごめん。：」

明らかに深く沈んだ『フリージア』の声に、キホクもさすがに
気を使い始めた。

「どうした？」

「…ごめん…なさい。」

「…」

「思い出してしまったの…。カネの塔での事。…皆キズだらけ
になっても私を…いえ、『フリージア』を守っていた。命に代え
ても使命を全うしようとする姿が…。また犠牲を出すかとも思っ
て…怖かった…」

「だから、自分の危険を冒してまで逃げ出してきたのか？」

「…」

「そんな事をされて怪我でもされたら、余計俺たちが困るんだよ。
『何も出来ないお姫様』が飛び降りようとしたとき、皆どれだけ動
揺したと思ってるんだよ？」

『フリージア』の胸がキリキリした。

「キホク…ごめんなさい…」

「謝るな！むしろ、『もっと早く助けに来い』ぐらい言えば良い
んだよ！」

キホクは、震えながらしがみつく彼女の手をギュツと握った。

「大丈夫だ。お前の事は必ず守るから。」

4人を乗せた2羽は無事にスナ国に着いた。

『フリージア』はランス達に礼を言々と、そのまま国王のもと
へ向かった。

その表情は、再び姫としての毅然とした様子へと変わっていた。

大広間には、国王が鎮座していた。

その顔に、焦りや安堵といった類は全くといっていいほど感じられなかった。

『フリージア』はひとりその御前に立った。

「ごくろうであった。」

ジアスは冷たく言った。その言い方を当たり前のように受け、『フリージア』は一礼すると、同じく淡々と語り始めた。

「少し騒がしくしてしまい、申し訳ありませんでした。しかし、マタイの思惑を聞き出す事には成功しました。」

「そうか。では聞かせてもらおう。」

「はい。――」

『フリージア』は休む間も与えられず、ジアスに全てを話した。「このたびの働き、ごくろうであった。もう少し犠牲が少ないと良かったのだが、それも致し方ない……しばらくはマタイも襲ってはこまい。ここに体を休めるもよし、一旦帰るもよし、好きにするがよい。」

彼女は何も言わず、深々と一礼した。

フリージア

翌日、キホクは姫の部屋を訪ねた。

姫は1人体を落ち着かせていた。

「お体の調子はいかがでしょう？」

「ありがとう。大丈夫よ。あなた達こそ、怪我は大丈夫？」

「ええ。…しかし…」

「どうしたの？」

「もう、あんな事はナシにしてくれ。昨日も言っただけ、俺たちは必ず守るから。いくら影武者とはいえ、手を抜く事は無い…」

「えー！！？」

姫の顔が強張った。その異変に、キホクはすぐに気づいた。

「！？ あなたは…」

姫は困ったようにキホクを見ていた。

「あなたは知っているのね？」

キホクはやっと、目の前に立つ姫が「本物」である事に気づいた。

「本当によく似ていらっしゃる…」

キホクはただただ、驚いていた。見れば見るほど、瓜二つなのである。

フリージアは小さくため息をついた。

「当たり前よ…あの人は…」

「『姉さん』と言っていましたね？」

フリージアは驚いた顔をした。

「マタイに連れて行かれたとき、あなたが奥の間から出てくるのを見ました。そして、小さく『姉さん』と言った事も…」

「そうだったの…思わず出て行ってしまったの…。あとで父に叱られたわ。ばれたらどうするんだって。」

「姉妹なのですね？」

キホクは全てを知りたかった。焦っても仕方ないほどたくさんの事を知りたがっている。それを抑えるのに必死だった。

フリージアは静かに続けた。あきらめたように。

「この事を知っているのは？」

「私だけです。」

「分かりました。では、話しましょう。」

フリージアは落ち着いた風に話し始めた。さすが一国の姫である。もしかしたら、実はその心臓は、口から飛び出そうなほどに動揺していたのかもしれないが…。

キホクもまた、ひとつの覚悟をしっかりと抱えた。

20年前

「そう、あの人は私の姉。双子の姉よ。私たちの運命は…この世に生まれた時から動き始めたわ…」

20年前・・・

スナ国王に子供が生まれた。

国王スザクは、いつもは滅多に見せない笑顔で国民と共に跡継ぎの誕生を喜んだ。

しかし、その裏では恐ろしい計画が持ち上がっていた。

産室で付き人に解放されている王妃ラビリス。

疲れた顔を残してはいたが、優しい笑みで見下ろすその腕の中には、安らかに眠る女の赤子がいた。

そしてその赤子は、双子だったのだ。

産婆はスザクに言った。

「このお子様は双子でございます。しかも、姿かたちは同じようにお育ちになるでしょう。」

それを聞いていたスザクは、とんでもない事を言った。

「どちらかを影として育てるのだ。」

「あなた?…」

そこに居た誰もが、初め何を言っているのか理解出来なかった。「姫を双子ではなく、ひとりと公表し、何かあった時の為に、どちらかを影に使うのだ。」

ようやく理解したラビリスは、驚きの余り言葉を無くした。

全ては、その後に追い討ちをかけるように発せられた言葉の性で…

「それともラビリス。 お前に王子を産む自信があるのか？ その体で。」

確かにラビリスは体が弱く、今回の出産もどちらの命がなくなってもおかしくないほどの難産であった。 そんな時でもスザクは、ラビリスよりも子供（跡継ぎ）を取ろうとしたのである。

スザクは、

「子を産み、スナ国の跡継ぎをさせるのが王妃の役目。」

まるでその言葉の塊のような人物だった。

しかしそれは裏の顔であり、表立った姿は、第一に国民の事を考え、貧しい民がいると聞けば使いをやって助け、流行り病が出れば国を挙げてその根絶に力を注いだ。

その為スザクは国王として、国民から多大な好感を得ていたのである。

★★★

結局スザクは、1人の姫が誕生したと発表した。

国民の前で穏やかな表情のスザクの後ろ姿を見ながら、ラビリスは深く悩んでいた。

『子供たちのどちらかを影として育てるなんて…』

「影」とはすなわち「光」の傍に在りつつも表に表れる事無く、その全てを「光」に依存し、捧げる。

「影」とは「光」のもうひとつの命なのである。

「どちらの子も、私の娘です。 手放すなんて出来ません。」

スザクに訴えるも聞き入れられるわけもなく、

「何を言っておる。 手放すのではない。 どちらも『姫』なのだぞ。」

その心を揺るがす事は出来なかった。

★★★

それから3年経った。

まだ3歳になったばかりの娘達は、自分たちがどういう立場に立たされているのかも分かっていなかった。

しきりに母の周りをくるくると回りながら、仲良くじゃれあっている所へ、スザクが現れた。

いつもと変わらず冷たい顔をして現れた父を、きょとんと見上げる2人。

ラビリスは来るべき時が来たと悟り、表情を曇らせた。

すぐにスザクの後ろから、少し白髪の間違った髪とヒゲを生やした小さな男性が現れた。

ラビリスも彼のことはよく知っていた。

武術家 ハイムである。

国一番と言われる武術の達人で、城の護衛を育てる師としても随分世話になっていた。

「ハイムに任せる。」

スザクは、ラビリスが娘のどちらかを手放す事を許すとは思っていないかった。かと言って、自分の目はどちらが「影」としてふさわしいか選びがたいものがあつた。だからこそ、スザクは自分より人を見てきたハイムの目を信じようと思ったのだった。

ハイムは2人の前に来ると少ししゃがんでみせ、目線を2人と同じ高さにした。

とても穏やかな光を帯びた目は、2人をゆっくりと見比べた。

2人の姫もまた、その瞳に惹きつけられたかのようにジッと見返していた。

しばらくしてハイムは、片方の姫と向かい合った。

「…来るかい？」

ハイムは優しく聞いた。

尋ねられた姫は、不思議と抗わなかった。

差し出されたハイムの手のひらに、何の躊躇もなく自らの手を乗せた。

何の抵抗も出来なかったラビリスの心は、この瞬間に脆くも崩れ落ちてしまった。

君の名は…

「それ以来、母は王妃としての責務を務められなくなったわ。でも、父はそれを病弱の性にして表には出さなかった。…いえ、出せなかったのね。」

キホクはジッと聞いていた。

出来るだけのイメージを膨らませて、どうにか全てを理解しようとして努力していた。しかしその全てを理解するには、余りにも時間と知識が足りなかった。

フリージアは、出来るだけわかり易くと気遣いながら話し続けた。

「姉さんとは…全く会えなかったわけではないの。国民の前にさえ姿が知らなければ良いんですから。でも、姉さんの姿を見ると母はとても辛そうな顔をするの。だから…姉さんも次第に城を訪れなくなったわ。」

「今までも、入れ代わっていた事があるのですか？」

「いいえ。カネの塔が初めてよ。まさか…本当にこんな日が来るとは思わなかった…」

フリージアは悲痛な表情を浮かべた。

「お願いキホク。姉さんを助けて。姉さんは、昨日ここを出る時に言って行ったの。『私は姉として、あなたを守るわ。だから、スナ国と母と父をお願いね。』と。」

キホクは、居ても立ってもいられない衝動に駆られた。

「今、どこに？」

「姉さんは…」

カチャツ☆

部屋のドアが開いた。

話を聞かれたのかと2人は一瞬固まり、ドアを凝視した。

「!! 母さん！」

ラビリスが使いに支えられフラフラと入ってきた。

「王妃！」

キホクはラビリスの体を支え、椅子へ座らせた。

ラビリスは精神的な苦しみが募り、その体は骨と皮だけにやせ細ってしまっていた。

「キホク……」

弱い声で、ラビリスはキホクに伝えた。

「キホク。ひとつ、あなたに伝えて欲しい事があります。」

それはラビリスにとって、キホクに全てをかけた一言だった。

★★★

程なくして、キホクは城の裏の森の中に居た。

多分国民の誰もが、足を踏み入れた事は無いその森は、「迷い森」と言う名が付いていた。

道なき道を進んでいくと、やがて小さな湖が見えた。

辺りはすでに日も傾き始め、夕陽の朱が水面をまぶしく波立たせていた。静かな空気が、穏やかな風と波の音と共に包んでいた。

そのほとりに立つと、キホクは声を上げた。

「『フリージア』……！　居るんだろ……？　出て来い……！」

声は湖と木々に吸い込まれるように消え、再び静けさが戻った。

「『フリージア』……！！」

2度読んでも出てこない彼女にイラつき、今度はもっと大きな声で……と思った時、後ろの木々がざわめいた。

「……！」

振り向くとそこに『フリージア』が立っていた。

その姿は、昨日までの煌びやかないでたちとは全く違い、何とも質素な服に包まれていたが、その瞳には王族らしい輝きが揺れていた。

「何度も名前を呼ばないで！ 誰が聞いているか知れないでしょう？ それに…どうしてここが分かったの？」

いぶかしそうに見つめた。

それでも、再び出会えた事がキホクにはたまらなく嬉しかった。

「よかった、無事で。」

「質問に答えてないわ。」

「フリージア姫に教えてもらったんだ。そして、全て話は聞いたよ。」

「…何故？」

「何故って…？」

『フリージア』は不機嫌そうに湖のほとりに腰掛け、背を向けた。
「そんな事、あなたには関係ないはずよ。あなたは…いえ、あなた達護衛は、『姫を守る事』が使命のはずよ。それ以外に無いわ。」

「確かに姫はフリージアだ。今、城に居るフリージアだ。だけど…」

キホクは、湖を見たままの『フリージア』の背を見つめた。

「君も姫だ。」

『フリージア』は少しうつむいたが、すぐに顔を上げた。

「だからってここに来る必要はないはずよ。あなたは、目の前にある使命を全うしたらいいの。他に何も考える必要なんてないのよ。」

キホクは、愛想もなく冷たい言葉を投げつけてくる彼女に、胸が痛くなるのを感じた。ただ目の前にある使命を全うする…それは彼女自身にも当てはまることなのだ。自分達と同じ…。その事を、もはや彼女は固く受け止めていた。

「帰って。」

目も合わそうとしない『フリージア』に、キホクは何も言えなかった。いまさら何を言っても、届かない…。説得する自信が、

今のキホクには無かった。

「悪かったよ：邪魔したな。」

『フリージア』は身じろぎひとつせずに湖を見ていた。

その小さな背中を見つめ、キホクは言った。

「ひとつだけ伝えておく。君は『知らない』と言っていたから：」

2人の間に穏やかな風が撫でていった。

「王妃からの伝言だ。：君の名前は『アリシア』というそうだよ。」

その肩がピクツと動いた。

「2人が産まれたとき、王妃は君にも名前を付けた。でもそれが表に出る事は無いことも分かっていた。王妃はこうも言っていた。せめて、自分の名前だけでも受け止めて欲しいと。」

アリシアはうつむいたまま何も言わなかった。

「アリシア。俺は君をそう呼ぶから。君は『フリージア』じゃない。アリシアだ。」

キホクはその場を離れた。心残りはあったが、自分が居てもこれ以上力にはなれないと思った。ただ、名前を伝える事が出来ただけでも、心の重荷が取れていた。

アリシアは、背にキホクの気配が無くなったのを感じると、なおも体を小さくした。

膝を抱え、肩をすくめ、震える身体：その瞳からは、ポロポロと涙がこぼれた。

「アリシア：私の：名前：アリシア」

脆いものを抱くように、何度も繰り返した。周りがやみに包まれるまで、アリシアはそのまま湖のほとりに居た。

マタイ 再び

早朝。

まだ陽も昇りきっていないスナ国の上空に、黒い影が迫っていた。

ゴウン★ゴウン★ と地響きのような音を響かせ、その影は城へとまっすぐに向かってきた。

たたき起こされる民。

城に住む国王たち、以下ランスたち護衛も同じだった。

「何があった!？」

ジアスの言葉に、側近ヨミがその前に跪いた。

「マタイの飛行船です! しかも今までよりずっと大きい船です!」
「何だと!? やはりこの間の報復に来たのか!」

ランスたちもすぐに大広間へと集まった。

望みは姫か、それともこの国か…

マタイの目的が分からぬ以上、スナの国もむやみに動くわけにはいかなかった。

しかし今回のマタイは、話し合いに来た雰囲気では到底ないようだった。

程なくして、城の上空へ船を泊めると何本もの梯子を降ろし、武装した兵たちが続々と降りて来た。そして、窓という窓を割って侵入してきたのである。

城の中が騒然となった。

兵だけでなく、家来やメイド達も居る。早朝のスナ国を悲鳴と怒号が包んだ。

「ワハハハハ!」

大広間へ笑い声と共に現れたのは、もはや3度目の来城となるレイユだった。

「スナの国よ！　とうとうマタイに本気を出させましたな！　大人しく言うことを聞いていれば、こんなに犠牲を払うこともないというに！」

その手に握られた剣からは、赤い血がポタポタと滴り落ちていた。ここへ来るまでに、一体どれだけ振るったのか：

「レイユー！！！」

ランスの怒りに満ちた声が広間に響いた。

「ワハハハ！！　もう抵抗しても無駄だよ。　姫は連れて行く！　悪いが、この国ごとマタイが頂くよ！！！」

レイユはそう言うと、クルツと踵を返し大広間を出て行った。

「娘は！フリージアはどこだ！！！」

ジアスが声を荒げた。

今連れて行かれたら、今度こそ全て終わりだ。　何故なら、今城に居るのは『本物のフリージア』なのだから！

そこへ、センに付き添われたフリージアが広間へ逃げ込んだ。できた。

「フリージア！　無事だったか！！！」

ジアスが安堵の表情を見せた。

それを見たキホクは国王に対して怒りがこみ上げ、言いたい事がたくさんあったが、今はそんな場合ではなかった。

その時、レイユを追っていたランスが戻ってきた。

「マタイの船が戻っていくぞ！！！」

「！？　どういことだ！？」

皆啞然としていた。　レイユは「姫は連れて行く」と言っただけだ。

キホクはフリージアの顔を見てハッとした。

「！！　まさか！！！」

言うが早い、キホクは大広間を飛び出した。

マタイの船は、少しの兵を残して城を離れ始めていた。

残されたマタイの兵達は戸惑っているようにも見えたのだが、それに気をとめる余裕もなく、キホクはセンに言った。

「チランとツシロを呼んでくれ!!」

センは大きくうなずくと、指笛を空へ打ち上げた。

程なくして2羽が遠くから向かってきた。

「セン! 頼む!!」

「ああ! 飛んで!!」

キホクとセンが城から飛び降りると、2羽はそれぞれを上手にキャッチし、マタイへと向かって飛び立った。

残されたランス以下兵達は、残っているマタイの兵と戦っていた。

「こっちは任せろ!」

ランスの声を受けながら、センとキホクはマタイの船を追った。

「アリシアが乗ってるんだ…あの船に…」

キホクは焦っていた。 どうかしてアリシアを助けたかった。

こんな時、何も出来ない自分をとても悔やんだ。

その心を感じたのか、キホクの乗るツシロは悲しげに一声上げた。

「キホクっ! 大丈夫だ、こいつらが付いてる!!」

珍しく大きな声でキホクを励ました。 しかしセンもまた、追いかけるしか出来ない事を悔いていたのだった。

センはいつからか、その動物的な勘でキホクの気持ちに薄々気づいていた。

そして影の存在も…

「キホク。 ボクは使命を全うするだけだ。 姫が誰であろうとね!」

「セン? 気づいていたのか?」

「昔から姫を知っているからね。 キホクも同じだろ? 本物の姫

は、あんなじゃじゃ馬じゃあないさ。」

センはウィンクして見せた。

確かに、キホクもセンと同じく、昔から姫をよく見ていた。

自分たちの練習を眺めていることも少なくはなかった。しかし、キホクはアリシア自身から聞かされるまで気づかなかった。

「俺、鈍感だからね…」

「何？」

「なんでもない。知ってるのはランスたちもか？」

「さあ。でもどちらにしろ、ランス達も同じ気持ちだと思うよ。」

キホクとセンは、前に行くマタイの船をキッと見据えた。

「ボク達は、使命を全うするだけだ！」

珍しくセンは力強かった。

キホクにとっての「使命」など、従うに値しない所まで落ちていたが、センやランス達は違っていた。国の為に生きているのだ。そして、アリシアもまた…

マタイ降伏 そして 消失

「!!!」

その時、マタイの船に異変が起きた。

船の一角から煙が上がったのだ。 かすかに爆発音のようなものも聞こえてきた。

「どうしたんだ？」

センが戸惑う。

「まさか…」

キホクは強い不安に襲われた。

船の中でアリシアが暴れているのでは…？ しかしそんな事を

したら彼女までもが：

そんな事を考えている間にも、マタイの船からは次々と黒煙と炎が上がっていた。

アリシアならやりかねない。

そのうちマタイの船が大きく傾いた。

軌道修正などという生易しいものではなく、明らかにバランスを失った傾き方だった。

「落ちるぞ！」

センが声を上げた。

「アリシア!!」

「キホク！ 近づいちゃダメだ！ 巻き込まれるぞ!!」

ただ見ていることしか出来ない。

2人を乗せた2羽は崩れ行くマタイの船の周りを何度も旋回していた。

『アリシア、頼む！ 無事で居てくれ！！』

キホクは心の中で必死に祈った。

そんな祈りを切り裂くように、マタイの船は怒号を上げてマタイの城へと墜落して行った。まるでスローモーションのように崩れ落ちていく城と船。

爆音と黒煙が広がり、マタイ国は闇と火に包まれた。

『助からない…』

思いたくない事が次々と頭をよぎっていた。

唇を噛みしめ、キホクはツシロにしがみ付くように崩れた。

「アリシアーーーー！！」

それを悲痛に見つめるセン。

マタイを包む黒煙は、スナの国からも見る事が出来た。

「姉さ…ん……」

フリージアとラビリスは愕然としていた。

ジラスもまた、眉をしかめてジッと黒煙を見つめていた。



スナの国が負った被害も決して小さくはなかった。犠牲者も何十人と出ていた。

その復興作業が続く中、マタイ国から一通の封書が届いた。

《 貴国の持つ力、マタイの持つそれより考えにも及ばぬほど強大と示された。 認めざるを得ないほどの損害を負った今、貴国へは奇襲も武力による侵略行使も無意味となり。

貴国の姫君を失った今、貴国にとっても大いなる痛手を負っている事と思われ。

自国の愚かさを詫び、数日のうちに使いを向かわせる。
話し合いにて、両国の繁栄に向けての協力を致したいと考える。

なお、貴国の致し申す事に何の異論も唱えぬ事を誓うこととする。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・マタイ国王ースザクー》

すなわちマタイ国の、スナ国に対する降伏の書面であった。

後にマタイ国は、スナ国の姫フリージアが実は健在であることを知り、再びスナ国の力の奥深さを思い知るのであった。

そして、極秘で行われた搜索の結果、フリージアの身代わりとなったアリシアの遺体や遺留品は、なにひとつ残っていないかった事も、ここで述べておこう…。

★ 第一章終了 ★

キホクの旅立ち

キホクは旅に出ることにした。

そのきっかけは、フリージア姫が発した言葉だった。

国の復旧作業も進み、ようやく国民にも笑顔が戻ってきた頃……それでもキホクの表情は沈んだままだった。

キホクの心の中からは、いつになってもアリシアの姿が離れなかった。

最後に見たアリシアの、湖に向かって座るその小さな背中が……。最期まで、アリシアには辛い思いをさせてしまった。

正しく「使命を全うして」アリシアは姿を消したのだった。

もし自分が同じ立場だったら：国の為に、家族の為に自分の命を捨てられるのだろうか？

そう考えると、辛くて仕方がなかったのだ。

そんな悲痛な姿を遠くから見ていたフリージア。彼女にも、キホクの気持ちは痛いほどよく分かっていた。自分もまた、姉を殺したようなものなのだ。

ある日、フリージアはキホクを呼んだ。

「キホク。あなたの姿を見ているととても哀れです。あなたは国民を守らねばならない身。あまりにも不甲斐ない姿ではありませんか。ランスやセンをごらんさい。あの悲しみを乗り越え、皆次の一步を歩み始めているではありませんか。」

フリージアの言葉は、キホクの心にグサグサと突き刺さった。

何も言えなかった。全てが当たっていたからだ。

フリージアの叱咤はなおも続くかと思われた。

「キホク、あなたはまだ、その役目を終えたわけではないのです。」
「分かっています…でも…」

「姉の事でしよう？」

「…はい…」

フリージアは小さく溜息をついて言った。

「私は、姉が死んだとは思っていません。」

「？　　どういふことですか？」

「私にもよく分からないのですが…　そんな気がしてならないのです。　まだどこかで生きていると…」

キホクは、その姉妹の見えない繋がりのような物を感じた。

そして、それを信じようと思った。　確かに、アリシアが死んだという証拠も見つかっていないのだから。

「フリージア姫…　お願いがあります。」

「私で出来ることがあれば…」

「自分を、旅に出させてもらえませんか？」

「旅に？」

「はい。　…姫の姉君…アリシアを探してみようと思います。」

キホクの瞳には、すでに新たな覚悟という輝きが宿っていた。

フリージアもそれに気づいた以上、彼を止める事は出来ない事も感じ取った。

「…分かりました。　でも、私ひとりでは決めかねます。　一度、国王に話してみなさい。　私も協力しましょう。」

この時、王妃ラビリスは以前より増して衰弱が進んでいた。

「母の事も、助けると思って…」

すぐに国王ジラスに相談すると、既に全てを知っているキホクに驚きつつも

「国の復興がまだ終わっていない今、武力を失うのは心苦しいのだが…」

と難色を示したが、フリージアも懸命に説得を続けるうち、

「：フリージアがそこまで言うのなら：」
と承認した。

にっこりと微笑むフリージアの横で、国王は少し厳しい表情でキホクを見た。

「キホク、頼んだぞ。」

その言葉には、重く深いものが詰まっていた。

「はい！」

キホクは誓いを込め、伸ばし放題だった髪の毛を切り落とした。国を出る前日、仲間であるランスやセン達に、旅に出る事を伝えた。

皆深く聞くことはなく、むしろ快くキホクを送り出してくれた。
「国の事は気にせず、思う存分修行してこい！」

仲間達の心強い言葉を背に、キホクは一路スナの国を旅立った。

ヨヤミ国

スナ国から約10日程歩き、キホクはある国に着いた。スナ国を出てからやっと着いた、国らしい国だった。

《 ヨヤミ国 》

あまり治安の良くない国として、スナ国でも噂には聞いたことがあった。

あまり気乗りはしなかったが、とにかく体を休ませたかったキホクは宿を探すことにした。

見つけた建物は少し寂れてはいたが、とりあえず眠れる場所があればと部屋を求めた。

ベッドへ倒れこむと、まだ陽が高いにも関わらずに一気に深い眠りへと落ちていった。

どれほどの時間が過ぎたのだろうか？

気を失っていたかのような睡眠から気づくと外は真っ暗。星が綺麗に瞬いていた。

急いで自分の荷物を確認した。幸い、部屋に忍び込まれて物色された気配は無いようだった。

ふと窓から外を見ると、街灯がふわりと灯す路地を何やら騒がしい空気が漂っていた。

キホクの職業柄、不穏な空気はすぐに感じ取ってしまうのだった。

薄暗い路地を走り抜ける黒い影。そしてそれを追うような黒い影。

追う影が少しよろけた。どうやらキズを負っているようだ。キホクは迷った。わざわざ異国の地で事を荒立たせる事もな

いのは…？　しかしやはりその体は、考えるより先に部屋を飛び出していた。

路地に出ると、先ほどの影はすでに消えていた。

しかし少し辺りを調べてみると、壁に少しの血痕が見えた。

やはりキズを負っているのか？

キホクは勘を頼りに先を急いだ。

やがて遠くで、刃物がぶつかり合う音が聞こえた。

路地を抜けた少し開けた広場で、2つの影がやり合っていた。

どちらも腕の立つ者のようで、ほぼ互角に見えた。

キズを負っているのはどちらなのか。　良識のある方はどちらなのか…

今はまだ全くわからなかった。　キホクはしばらく様子を見ることにした。

一一一

しかしこの街灯のみの薄暗い場所で、よくも昼間のように相手を見極め、動けるものだ…

キホクは少し感心するように2人の戦いを見ていた。

片方は背の高いがっちりした体格のようで、短髪。もう片方は背はそれほど高くなく、黒フードで顔もすっぽりと隠されていた。

「！！」

キホクは危うく飛び出す所だった。

「黒フードのあの動きは…」

見覚えのある癖。　足払いや身のこなし…

「まさか…」

わずかな期待がキホクの胸をよぎった時、戦いの終わりが訪れた。

黒フードがグッと足に力を込め、相手の懐に入り込むと一閃！その腹を切り裂いた…しかしわずかな間で相手も体を避けたらしい。

かろうじて踏ん張る体で黒フードから離れると、そのまま逃げる姿勢になった。

追おうとする黒フード。

しかしすでに追うほどの余裕も無くなったらしく、とうとう膝をついた。

瞬く間に闇の中へ消えて行った相手の影。

キホクは急いで駆け寄りたかったが、何故か体が思うように前に進まなかった。

かろうじて一言、搾り出すようにこぼれた。

「アリシア？」

「!?!」

黒フードは、驚いたようにキホクの方を見た。暗くて顔が見えない。

暗がりの中、黒フードもまたキホクの姿を確認し難いようだった。だが、その名を知っているのはごくわずかな人物だけ。

しかしすぐに体を起こすと、キホクから離れようとした。

「アリシアなんだろう？ 俺だ、キホクだ！」

黒フードは何も言わずに広場を出ようとしていた。

「アリシア！」

キホクは駆け寄ると、その左腕を掴んだ。

その拍子にフードが取れ、やっとその顔が見えた。

「…アリシア？」

その顔は、キホクのよく知るあの美しいフリージア姫そっくりな顔とは程遠いものだった。

「あ…」

アリシアの顔左半分が、見るも無残に赤黒く変色していたのだった。おそらく、マタイの船が墜落した時に負った傷であろう。酷くその顔半分を破壊していた。

「!」

アリシアは無言でキホクが掴む腕を振りほどいた。と同時に、再びその体がぐらついた。

「アリシア！ どこにキズを負ったんだ？」

支えた彼女の体は、相変わらず細く華奢なものだった。

説得

広場の一角にアリシアを座らせると、もう一度聞いた。

「アリシア。どこにキズを負ってる？ 早く手当てしないと大変なことになるかもしれない。」

しかし彼女は目も合わせず無言だった。

業を煮やしたキホクは、

「アリシア！」

と体を大きく揺らした。すると思わず、キズの痛みにもうめき声を上げた。

そして押さえる左の太もも辺り。そこに、先程刃物で切られたキズがあった。

キホクは躊躇なくそこを破り切ると、アリシアの太ももを露にした。彼女の太ももはその出血が灯りに照らされキラキラと光っていた。

「ひどいな…」

顔をしかめながら、キホクは自分の持っていた布切れを止血代わりに結び、手際よくキズの処置を始めた。

★★★

しばらくして、アリシアがやっと口を開いた。

「なぜ、ここに？」

「君を探してたんだ。」

「私を？」

「会えて良かった。」

キホクはにっこりと笑ってアリシアを見たが、彼女は若干視線を外して、どこか戸惑っているようだった。

「私は死んだわ。」

「え？」

「私はもう、フリージアの代わりになることは出来ない。私の役目は終わったのよ。」

「それが君の死とどう関係あるんだよ？」

「生きていても仕方ないって事よ！」

アリシアは吐き捨てるように言った。

「あの時の性で、こんな顔になってしまった。2度とスナ国へは帰れないと悟ったわ。こんな顔じゃとても……」

キホクは驚いた。

「アリシア！ 考えすぎだ。皆そんな風に思っちゃいない。アリシアは自分の命と引換えにスナ国を守ろうとした。その事實は強大だ。マタイももはや降伏状態だ。そりゃ、犠牲は少なくなかったけど……でも君は、誇れる事をしたんだ。胸を張って帰ることが出来るんだよ。」

「そんな事……ない……」

「国王だって、それを望んでる！」

「そんなはずない。あの人は……家族でさえ国の為になるなら犠牲にできる冷酷な人よ。もう使えなくなった私を必要としているはずないわ。」

アリシアはそんな慰めなど聞きたくないという風に耳を塞いだ。その手を掴んで、キホクは優しく言った。

「その国王が、泣いていたんだ。」

「？ まさか……」

驚いて見た見たキホクの顔には、優しい笑顔が浮かんでいた。

またすぐに目をそらした。キホクは続けた。

「あの事件の後、俺はもしかしたら君が戻って来てるんじゃないかと思ってあの森に行ってみたんだ。君ならそうしかねないだろう？ そうしたら、先客が居た。国王だ。俺は身を隠して様子を見ていた。国王は、あの小さな湖を見つめたままずっと立っていた。

微動だにせず、ただじっと立っていて…小さくつぶやいて…下を向いた。その時、はっきりと見たよ。国王の頬に、光るものが滑り落ちたのを。」

「まさか…」

アリシアは、信じられないというように繰り返した。

「『すまない』と言っていたよ。」

アリシアはフィットと横を向いた。キホクは感じていた。彼

女はまだ受け入れられないだろうということ。

約束

それからしばらく静かな時間が流れた。

もうすぐ夜が明けようとしていた。

アリシアがおもむろに立ち上がった。そして、キホクを見下ろした。キズの残る顔半分は、髪の毛で隠されていた。

「…一緒に来て欲しいところがあるの。」

「キズは…いいのか？」

キホクの心配そうな顔に少し無愛想に答えた。

「大丈夫よ。」

大人しく彼女の後を歩くキホク。

やがて町を抜け、小高い丘へと登って行った。その足取りは、やはりキズが痛むのか多少びっこを引いていた。

キホクは、彼女がどこへ行こうとしているのか見当も付かず、また、声を掛ける事も出来ず、ただ黙って彼女の後を付いていった。

30分程歩いただろうか…

2人は雑木林を抜け、少し開けた場所に出た。

辺りはすっかり白んできて、やがて訪れる日の出を待っているような静けさに包まれていた。

「見て。」

アリシアが指した方を見ると、遙か彼方にポツンと塔のような影が見えた。

「あれは？」

「マタイ国の城よ。」

「あんなに小さく…」

手をかざすと、小指の爪ほどの大きさ。かなり遠くまで来たようだ。あれからどれ位の月日が経っているのか…マタイも修復が進んでいるようだった。

「あの城の向こうに、スナ国がある…母やフリージア、父…そして、ランスやあなた達が居ると、ずっと想っていた。帰らないつもりだったけれど、何回ここに来てあの城を眺めていたか知れないわ。あんなに憎いと思っていたあの城を…見ていたのよ。」

「皆元気だよ。君のおかげで、皆笑顔を失くさずに済んだ。ただ…」

「？」

アリシアはキホクを見た。

「王妃は、あれ以来ますますお体を悪くされていて、起き上がることも難しくなっているようなんだ。」

「母さまが…」

アリシアの表情が曇った。

「アリシア。君にしか出来ない事が、まだあるんだよ。スナ国に帰ってやってくれ。」

「キホク…」

アリシアの心の中に、家族や仲間たちの姿が思い起こされた。そして、今まで起きた事も…。

しばらくマタイの城を見つめ、アリシアはやっと決心した。

「分かった。スナ国へ帰ります。」

「ありがとう。」

キホクは心からホッとした。これでスナ国も安泰だ。その時アリシアは、再会して初めて微笑みを見せた。

「いいえ、キホク、あなたのおかげ。あなたに会わなかったら、私はずっとここで夜の住人になっていたわ。」

「だいぶ場数も踏んで、実力も付いたんじゃないか？」
「さあ。」

アリシアは自分の足の傷を指し、そして2人は笑いあった。

落ち着くと、キホクは言った。

「帰り道は分かるだろ？」

「え？ キホクも一緒じゃないの？」

アリシアは、てっきり自分を連れ戻す為に探しに来たものだと思っていたので、驚いていた。

キホクは遠くマタイを見て、静かに言った。

「ああ、そのつもりだったけど、気持ちが変わった。」

「どういうこと？」

「もう少し、旅を続ける事にするよ。」

アリシアは、キホクの今までにない真面目な顔に戸惑った。

「何故？」

「俺は以前、アリシアの事を必ず守るとそう言った。でも結局、アリシアにこんな怪我まで負わせて…失格だ。言う資格なんてない。」

「そんな事…」

言いながら、アリシアは髪で顔半分を隠していた。実際、生き永らえながらも逃れるように外国へと出て行った事は事実だった。決して周りの者に恨みを持っていたわけではないが、結果的に、キホクにそう思わせてしまうのは当たり前だった。

キホクは続けた。

「だから俺は、強くならなきゃいけない。精神的にも、体力的にも、君を守るように。」

アリシアは黙ってキホクを見つめた。

涼しい風が2人を包んでいた。

「約束、してくれないか？」

「約束？」

「1年後…俺は必ずここに帰ってくる。その時、アリシア…君に待っていて欲しいんだ。」

「1年後…ここに？」

「もしその時、俺の事を少しでも信じていてくれていたなら…で、良いんだ。」

キホクはジッとマタイを見つめていた。

「俺はまだ、あの向こうに帰れる身分じゃない。」

次にキホクがアリシアの方を向いた時、既に彼女の姿はなかった。

音も立てず、言葉も掛けず、彼女は姿を消した。

それが何を意味していたのか、キホクには分からなかった。

ただ、今この瞬間から、自分探しの旅が始まると感じた。

キホクはもう一度、マタイ城を見つめた。

太陽が遥か彼方にそびえる城をキラキラと輝かせていた。

再会

城の中は静かに盛り上がっていた。

フリージアはアリシアの姿を見るなり涙を浮かべて駆け寄り、ギュッと抱きしめた。アリシアは、多分初めてであるその抱きしめられた感触に戸惑いながらも、何とも言いがたい深く暖かいものを感じた。

車椅子に座っていた王妃ラビリスはまだ立ち上がれなかったが、初め信じられないと言った風に驚いた顔で、アリシアの顔を何度もなでて確かめた。

そして、涙を流しながら何度も「ごめんなさい」と謝った。

アリシアは何度も首を横に振り、

「母さまの性じゃないわ。私が勝手にした事だもの。だから、謝るのは私の方： 迷惑掛けてごめんなさい：」

その3人の前に、国王ジアスが現れた。

ラビリスは身をこわばらせてアリシアにしがみついた。もうどこへも行かせないという表れだった。

ジアスは静かに名前を呼んだ。

「アリシア：」

「：」

アリシアは無言で父を見つめた。そこには、疑いも恨みもなく、全てを受け止めようとするまっすぐな瞳があった。

「アリシア、今まで私は、国の事しか考えていなかった。それが、私の使命だと思っていたからだ。だがお前が行方をくらし居なくなった事で、何か：」

ジアスは少し言いにくそうに続けた。

「：何か、大切な物を思い出した。」

アリシアにしがみ付いていたラビリスの腕の力が少し緩んだ。

それに気づいた彼女は、母の顔を見た。ラビリスはまだ少し震えながらも、ジアスの次の言葉を待っていた。

ジアスは3人の顔を順に見て、言葉を選ぶようにゆっくりと続けた。

「失くしたものは、もう戻らないだろう…だが、違う何かを取り戻す為、これからも努めていくつもりだ。しかし今までのような、家族を犠牲にする事はもうしない。そう誓う。」

「父さま？」

フリージアも、ジアスの心変わりははっきりと感じ始めたようだった。

「こんな私を、これからも『父』と…思ってくれるだろうか？」

ラビリスの瞳からは、大粒の涙が零れ落ちた。

アリシアは母の肩をギュッと抱きしめ、フリージアと目を合わせた。

彼女もまた、嬉々とした笑顔で、瞳には溢れそうなほど涙をためていた。

アリシアは目の前に立つ人物を、今までただの『国王』と思ってきた。彼の『父』らしいことは何一つ覚えていなかった。だが、今こうして改めて顔を見ると、何か懐かしく暖かいものを感じずには居られなかった。

今までの全てを許すことは出来ないかもしれない。例え出来たとしても、時間が掛かるかもしれない。ただ、今この瞬間から、新しい何かを見つけることが出来る気がした。

アリシアは母から離れ、ジアスに歩み寄った。

「もちろんです、父さま。」

ジアスの前で見上げるアリシア。ジアスの目には、幼き頃のアリシアに重なって見えた。感極まる感情を必死に抑え、ジアスはそっとアリシアを引き寄せた。

間違えればすぐに壊れてしまいそうなガラス細工を手にしたかのように、ジ阿斯は優しく優しく彼女を抱きしめた。

フリージアも傍に寄り添い、ジ阿斯は2人の娘を大切に大切に抱きしめた。

キズ

アリシアは、今まであった事を全て話した。

そして、自分を探して旅を続け、この国へ帰るように説得してくれたキホクは、再び旅を続けることにしたと。

そして何日か経って落ち着いた頃、アリシアは母ラビリスの部屋に呼ばれた。

ラビリスはだいぶ調子を取り戻し、最近では城の中をゆっくりとだが歩くことも出来るようになっていた。

アリシアが部屋に入ると、ラビリスはお気に入り窓際の席で陽射しを気持ちよさそうに浴びていた。

「母さま、今日もだいぶ顔色が良いみたい。」

アリシアも、母が日増しに元気になっていく状態を見るのがとても楽しみだった。

「ええ。朝から天気も良いし、気分がとても良いの。それにアリシア、あなたにも良い知らせがあるのよ。」

「私に？」

ラビリスは自分の前の席にアリシアを招くと、お茶を勧めた。

「アリシア、あなたのその顔のキズを治してくれる人が見つかったのよ。」

「このキズを？」

アリシアの顔には、相変わらずひどいヤケドの痕が残っており、今はターバンを少し緩めた縛りで隠していた。

母だけでなく、家族全員が彼女のキズに心痛めていて、密かに治す方法を探していたのだった。そんな矢先、有力な情報が舞い込んできた。

しかしアリシアの表情は曇った。

ラビリスは察して優しく微笑んだ。

「アリシア。 私たちは、もう昔の過ちは繰り返したくないの。あなたにも幸せになって欲しい。 あなたの心のキズが癒えるにはまだ時間が掛かるでしょう。 でも、そのヤケドのキズが治って、少しでも心に光が戻るのなら、それは私たちの喜びでもあるのよ。」

ラビリスは立ち上がると、アリシアに歩み寄った。

「もう誰も、あなたを利用しようなんて言わないわ。」

「母さま…」

正直彼女の中では、このキズを負った顔のままでも良いと思っていた。 ある意味、それは一種の逃げでもあった。

『もう誰かの代わりになるのは嫌だ。』

という深層心理。 どこかでまだ信じる事が出来ない心。 なんとかして素直な心を取り戻したかったが、それにはまだ時間が足りなかった。 いや、時間が解決してくれるとも限らない。 そんなモヤモヤが、まだアリシアの心には巣食っていたのだった。

そんなアリシアの苦悩を、母も知っていた。

「まだ、どこかで怖がっているの。」

つぶやくように言うアリシアを、ラビリスは優しく抱きしめた。

「もう独りじゃないのよ、アリシア。」

「…うん。」

アリシアは母の腕の中で、優しい香りに浸った。

何とも言えない安らぎの中で、今度こそ、自分も一步を踏み出す時だと決意を固めるのだった。

ミドリ村

一方、キホクはと言うと：

ヨヤミ国でアリシアと別れた後、スナ国とは反対方向へと歩みを進めていた。

実際キホクの中で、もはや何を目標とするかが分からなくなっていた。

ただ、あまりにも無力で小さな存在だという無念さのみがキホクの心を支配していた。

『一体俺に出来る事は何なのか： 俺が求めるものは何なのか：』

答えは闇の中だった。

ひたすら模索して、キホクはただひたすらに歩いた。

森の奥深くさ迷い歩いた末、見知らぬ村の前でキホクは気を失い倒れた。精神的にも体力的にも、彼は限界を超えていた。

その時ちょうど村の中から歩いてくる人影があった。

片手にカゴを持ち、長い髪を二束に分け、三つ編みでまとめた少女。

無防備に横たわっているキホクに気づくと、少し戸惑った様子を見せたがすぐに駆け寄った。

「だ：大丈夫ですか？」

汗まみれの髪をかき上げると、かなりの熱が伝わった。

「大変！！　すごい熱だわ！！」

少女は村の中へ駆け戻り、助けを呼んだ。

どれほど気を失っていたのか： キホクはゆっくりと目を覚ました。

窓から差し込む陽射しが一層目を覚まさせた。

上半身を起こしてみた。

「!!」

頭、肩、腰、体中に痛みが走り、思わずゆがむ顔。そしてすぐにハッとした。

「ここは…?」

キホクは体中を丁寧に治療されていて、清潔な布で包まれたベッドに寝かされていたようだ。そばの小さな台には、塗り薬や包帯といった医療具が並べられていた。薬品の匂いが部屋を漂っていた。

「一体誰が…」

ゆっくりと周りを見回していると、カチャツと音がして、静かにドアが開いた。

「あ、やっと目を覚ましたのね?」

入ってきた少女は、嬉しそうにベッドに駆け寄った。

「でも、まだ起き上がらない方がいいわ。あなた、丸二日うなされていたのよ。」

「丸二日も?」

キホクの驚く顔を無視するように、少女は彼をベッドに寝かせた。

「森の中で有毒な虫にでも刺されたみたいで、すごい熱だったのよ。倒れてたのがこの村の入り口で良かったわ。」

「そうだったのか… 実はあまり記憶がなくて。」

少女は手際よく包帯を取ると、次々に治療していった。

「よく見れば他にもあちこちキズだらけだし、相当歩いてたみたいね。何かから逃げていたの?」

「そんなわけじゃないけど…」

「何でもいいけど、しばらくは動くのも控えたほうが良いわ。疲労も溜まってみたいだし。」

少女はてきぱきと話した。

「ありがとう。俺はキホクだ。」

「私はサリィ。」

彼女は一通りの治療を終えると、また来ることを告げて部屋を出て行った。

キホクはゆっくり息を吐くと、横になったまま窓の外を眺めた。透き通った青い空に少しずつ赤みが増して、夜の訪れを感じさせていた。

サリィは何も聞かずに見ず知らずの自分を看病してくれた。

キホクはその事に感謝して、聞きたいことは明日聞こう。そう思った。そして再び気を失うように眠りについた。

翌日もカラッと晴れた気持ちの良い天気恵まれた。

キホクは昨日よりも穏やかに目覚めた。

変わらず治療に訪れたサリィと話した。

ここはミドリ村。

別名、葉の村。聞けば、スナ国にも葉を売っているのだとか。村の民はほとんどが葉の知識を持っていて、大抵は医学へと進むのだそうで、17歳のサリィもいずれはここを出て自分の診療所を持ちたいのだと話した。

クルクルとよく動くサリィの瞳には、夢と希望に満ち溢れた輝きが溢れるように潤んでいた。何故かキホクは、それを見られないうでいた。とても心が痛くなるのを感じた。

サリィ

それから何日か経って、キホクは歩き回れるまでになった。

サリィの話では、もし有毒な虫に刺されていたとしたら、これだけ回復が早いのは幸運だったのだと言う。

生命力だけはあるのだと答えると、サリィはコロコロと笑った。屈託のない、素直な笑顔だった。

サリィは本当によく働いていた。

朝早くから薬草を摘むために森へ入り、昼間は近所の病院で研究をしながら実務もこなしていた。

両親も健在で、2人とも医者を勤めていた。

キホクは、看病してもらったお礼を言いに両親に会いに行った。2人とも優しい人で、

「怪我人や病人を助けるのは当たり前なのだから。」
ととても謙虚だった。

キホクは人を疑わず慈愛を持って接するその姿勢に、萎縮してしまう自分を感じた。

てきぱきと働くサリィに、キホクは聞いた。

「サリィは、朝からそんなに働きづめで疲れないのかい？」
すると彼女は、ケロッとした表情で答えた。

「疲れはするけど、そんなの吹き飛ばす位の力を貰うから大丈夫なの。」

「吹き飛ばす位の力？」

「そうよ。」

サリィはにっこり笑った。

「元気になった時の、とても幸せそうな顔。」

そう言いながら彼女はキホクの顔を覗き込んだ。

「キホク、あなたが元気になって、本当に嬉しいの。」

自分の事のように嬉々として話すサリィに、キホクは再び自分の影を感じた。

アリシアの事を思い出した。

『俺は、アリシアの笑顔を見たい。』

いつも何かに抑えられ、自分の事より誰かの事を思い続けたアリシアは、心の底から幸せを感じたことがあるのだろうか？ 心の底から笑った事があるのだろうか？ 今この時、家族と再会して幸せで居るだろうか？

その為に自分が出来る事は何なのか…

再び悩んでしまった。

キホクは再び旅に出る事にした。

いつまでもここで足踏みをしているわけにもいかない。 答えが降って沸いてくる事もないだろう。

明日の朝早くにでもこの村を出ようと決心して、最後になるであろう、フワフワの清楚なベッドに体を沈めた。

事件

「キャアーーーーー!!」

早朝、森を切り裂く程の悲鳴に、木々に止まっていた鳥たちが一斉に飛び立った。

そして村の中をざわめきが包んだ。

物騒な姿をした男3人が、少女に武器を突きつけて歩いていた。キホクも姿を隠してその様子を見つめていた。

そしてその少女を見て驚いた。

「サリィ！」

思わず飛び出していこうとする体を必死で抑えた。

『今はまだだめだ!』

男たちは周囲に銃を向け、威嚇しながら村の中を歩いていた。

少し開けた所で立ち止まると、サリィに先導させているリーダー

らしい男は言った。

「この村の長を呼べ!　へんな真似はするなよ。　この娘がどうなつても知らんぞ。」

彼女の両親も広場に出てきていた。

「サリィ!　どうして…」

何も出来ない両親はただ、見守るしか出来なかった。

しばらくして遠巻きの人だかりの山が割れ、白髪と、あごにはたっぷり白髭を蓄えた小さな老人が現れた。

「ワシがこの村の長じゃ。　ここでは何かと騒がしい。　少し場所を変えんか?」

長の言葉に、男は笑った。

「その必要はない!　俺たちの要求を聞けばいいだけだ。」

サリィはずっと震えていた。　キホクはジッとチャンスをうか

がっていた。

「探し物をしていてな。：これなんだが、あんたらなら分かるだろう？」

懷から深緑の錠剤のようなものを取り出すと、親指と人差し指でつまんで長の前に掲げて見せた。

「そ：それは、トリユフじゃな？」

周りの人たちも一斉にざわめきだした。

キホクは一番近い村人を引き寄せ、あれは何だと聞いた。

「あれは：そうだな、麻薬の一種だ。一粒飲めば、数分でトリップしちまう。最初は手術の時の麻酔に使うものだったんだが、どっかの医者が遊びでアレを作り出してしまったらしくて。一時期、大きな町で流行って問題になったんだ。」

「なぜそんなものがここにあると？」

「何言ってるんだ。ここは薬の村だぜ。原料なんて五万とあると思っただろう。」

そう話しているうちに、男たちは続けた。

「どうだ。少し分けてくれたら、この娘は返してやるよ。」

人々はざわつき、長も困ったように黙っていた。

その時だった。

「分かったよ。」

答えたのは長ではなく：人ごみをかき分けるように出てきた若者だった。

ターバンで目深に顔を隠し、服も薄汚れていて、一見胡散臭そうな風貌だった。

男は怪訝そうに言った。

「お前が？」

「ああ。俺が家にたくさん持つてる。ついてきな。」

そう言うと、返事を待たずにくるっと踵を返し、スタスタと歩

いて行った。戸惑った表情をしたが、リーダーは仲間の2人に、後を付いていくように指示した。そして自分はサリィと共に残った。

2人の仲間は用心深く銃を構えながら、若者が歩いて行った方へ向かった。

「？ 確かにこっちの方へ来たんだが…」

若者を見失った2人は、路地裏で戸惑っていた。早く見つけないと、リーダーに叱られるどころじゃない。

「お前、向こうを探せ。俺はこっちへ行く。」

2人は手分けして探すことにした。

「くそっ…どこに行きやがった？」

焦りながら路地を早歩きする男の背後に黒い影が迫った。

「！！」

ドンッ！

男が振り向くが早いか、頭の鈍痛と共に倒れた。その傍に立つのはさっきの若者だった。ターバンを邪魔そうに外し、捨てるように落とすと、それはキホクだった。

「1人だとたいしたこと無いのな。」

少し離れた所には、もう1人の男が倒れていた。

「遅えな。何やってんだ、あいつら？」

数十分待っただろうか？ いい加減にイラついた風の男。周りの人間達も動くことが出来ない。サリィもそろそろ限界に近づいていた。

「お待ちの方は、この人たちかな？」

ざわついた人ごみ。

ドサッと投げ込まれた2人の失神した仲間を見るや、リーダーが驚きの声を上げた。

「！？ 何！ 貴様ー！！」

銃を向けた時には既に、リーダーの目の前に走りこんでいたキホク。驚いている間もなく、その顔に容赦なく鉄拳が入ると、あっけなく事件の幕は下りた。

力なく崩れ落ちるサリイを抱き支えるキホク。まだ小さく震えている体。

ようやく顔を上げて、やっと笑みを浮かべた。

「あ…ありがとう。…あなた、兵隊さん？」

「まあ、そんなところかな？ サリイもよく頑張ったな。」

3人の男たちは村人によって拘束され、処分はいずれ決めるらしい。

一方キホクは、村を救った勇者として感謝の言葉を浴びていた。そして、今後も村の為に残ってくれないかと懇願された。

しかし当の本人は、すでに旅に出る決意を変える気はなかった。

新たな旅立ち

その夜、キホクは村で一番高い時計台から周りを見つめていた。ここからは、スナ国どころかマタイ城の影も見えない。ただ、広く暗い森が広がるばかりだった。黒く広がる夜空には、昼間の騒動を忘れさせるように満天の星が瞬いていた。

「キホク。」

振り向くと、サリイがいた。

「大丈夫なのか？」

「ええ。この医学レベルを舐めないで。」

そう言うと、昨日と同じ明るい笑顔でキホクの横に座った。

「何を見ていたの？」

「見えない所さ。」

「？　　そういえば、キホクはスナ国から来たんだっけ？　　遠いところよね？」

「ああ。　遠いよ。　遠くて：届かない。」

サリイは、キホクの顔をのぞいて表情を読もうとしていた。

「サリイ。」

急に名前を呼ばれて驚いたサリイ。　キホクは少し笑った。

「君は、俺の答えなのかもしれない。」

「？　　どういうこと？」

「上手く言えないけど：君を見ると、自分の小ささを感じてさ、嫌気がさしていた。」

サリイはジッとキホクの言葉を聞いていた。　彼女は、その言葉にあるであろう、裏を感じようとしていた。

「今まで俺は国の兵として、国の為に自分を捧げると誓っていた。死ぬ時も、俺は国の為に命を落とすのだらうと。　でも、それは違う大切なものを見つけてしまった。　それを守るにはどうした

らしいのか全く分からなくて、その答えを見つける為に旅を続けて来たんだ：」

「答え、見つかったの？」

「：何となくかな。」

サリィはくすつと笑った。

「そうねえ： 私が言うのは説得力が無いかもしれないけど、男は少し不器用な方が良いと思うの。だって、女の子はそれを見て強くなれるんだもの。」

それを聞いて、キホクは焦った。

「強くなれたら困るんだよ。 何のために男が居るんだよ？」

「あははっ。 違う違う。 力が強いとかじゃなくて、精神的によ。 女の子は、実は頼って欲しいのよ。 大丈夫よ。 キホクが想うその彼女も、きつと強いわ。」

サリィにはもう分かっていた。

強く想う彼女をどうしたら守れるのか、旅をしてまで答えを探そうとするとは、何と不器用なんでしょう。 それが可愛く思えて、くすくすと笑ってしまった。

キホクは少しふくれた。

「何で笑うんだよ？」

「ううん。 なんでもない。 キホクって：可愛いね。」

2人は並んで、夜空を見つめた。

「離れて1人でもがくより、2人で見つける事が大切なかもしれない。」

キホクは、サリィの言葉を胸に深く刻んだ。

★★★

キホクが旅立つ朝。

村の人たちが総出で見送りに出ていた。

「旅の人。 あなたの事はずっと忘れないでしょう。 村を救ってくれて、本当に感謝している。 旅が無事に続けられますよう、祈っております。」

長の言葉に見送られ、キホクは村を後にした。

しばらく歩くと、後ろから呼び止める声が聞こえた。 振り向くとサリィだった。

息せき切って駆け寄ってくると、大きく息をして整えた。

「キホクごめんね、遅くなっちゃって…」

一息で言うその手には、小さな包みがあった。

「これは？」

手渡されながら聞くと、サリィはにっこりとした。

「私が調合した薬よ。 疲れがすぐ取れるの。 私の得意なお薬。 効果抜群なんだから！」

そう言って、サリィはそっと抱きしめた。

「よい旅を。 そして、想いが届きますように。」

キホクは少し戸惑ったが、すぐに抱き返した。

「ありがとう、サリィ。」

「いつかきつと、私ももっと勉強して、強くなるわ。」

見送るサリィを背に、キホクは歩き始めた。

この村に来る前にあった胸のモヤモヤは、だいぶ薄れていた。

アウトロス

アリシアはその顔の傷を治すため、城の一角の部屋に居た。

医者が来るといふ方角からは柔らかな光が差し込んできて、その暖かさの中にいるだけで、眠りにも似た気持ち良さを感じることが出来た。

アリシアは今、とても落ち着いていた。

生まれてからずっと、この身を自分のものと感じたことは無かった。許されることではなかったし、むしろ考えることもなかった。

これからは、この体は私のものなのだとすることを許された。

『国の物』ではなく、『自分の物』なのだ。

アリシアはやっと、自分を取り戻すことが出来かけていた。

そんな新しい幸福をひしひしと感じていたのだった。

柔らかな大ぶりの椅子に座って陽の光を浴びていると、コンコンッとノックの音がした。

「はい。」

開かれた部屋のドアの方を見ると、召使に付き添われた医者とおぼしき男性が部屋の入り口に立っていた。

「失礼致します。姫様のお顔の傷を治す為、内密に命を受け来城致しました。」

深々と一礼する男の顔はまだマントに隠れていたが、すぐに取り去った。

切れ長で青い目。深い藍色の長髪。年の頃は50歳くらいだろうか。初老と呼ぶにはまだ若そうな感じを受けた。

「ご苦労様。下がっていいわ。」

アリシアは使いを下がらせると、医者の中へ招き入れた。

「素性を聞いてもいいかしら？」

「はい。名はアウトロス。ミドリ村の出身です。今は近郊の村で開業医をしています。」

「私のことは知っています？」

「ええ。この事に関しては、国王と固く誓約を交わしました。どうぞ、ご安心を。」

アウトロスの深く優しさを感じるその声に、アリシアの居心地は良かった。

家族が親身になって探してくれた目の前の人物。託してみることにした。

軽く触診をして、アウトロスは持ってきた薬草を調合し、火傷の痕を治療し始めた。

「だいぶ放っておいたようすなあ…。浸食が激しい。」

「痕、残るかしら？」

心配げなアリシアの声に、アウトロスはにっこり笑って言った。

「心配ありませんよ、姫様。時間は掛かるかも知れませんが、私の持ち得る全ての知識と技術で、必ずや治してみせますよ。」

その深く優しい微笑み。

そんな笑みに、アリシアもそっと返すのだった。

アウトロスはアリシアの傷が治るまで、物資を調達したり必要な時以外はほとんど、泊り込みで治療に携わることになっていた。

アリシアは、そんなアウトロスを案じた。

「ずっと家に帰れないのは辛いでしょうに。家族も居るんでしょう？」

アウトロスは少し苦笑いを交えて言った。

「いえ。私に家族はありません。村には弟子も残っておりますし、何か大きなことが起こらない限りは大丈夫です。いやはや、こんな歳になっても医業一筋なのも問題だと思われるかも知れませ

んが…」

「いえ。とても素晴らしいと思うわ。」

アリシアは少しホッとした。

アリシアの寂しさ

皮膚が生まれ変わると言われる約一ヵ月後。

毎日治療してくれるアウトロスのおかげで、沈着していた色素もだいぶ薄れ、アリシアの顔に刻まれていた過去の傷は日増しに治ってきていた。

同時に、アリシアの心も次第に晴れていくのも感じていた。

アウトロスは、顔の傷だけでなくメンタル面でも大いに役に立っていた。

とはいえ大したことはしていないのだが、アリシアにとって、むやみに口外しないアウトロスはとても安心できる存在になっていた。

アウトロスは根掘り葉掘り聞く人ではなく、アリシアが話したいと思えばずっとそれに聞き入り、他には何も立ち入ることは無かった。

だからアリシアは、心に余裕を持つことが出来ていた。

しかしそれと共に、彼女の中には少しずつ何か足りないものがあることを感じていた。

父も母も妹フリージアも、治療中のアリシアの事を思い、治療が終わるまでは顔を見せないと、伝達が届いていたのだ。

アリシアを思っただけの事だったが、当の本人にとってはあまり嬉しくない選択だった。

もともと1人で居ることは平気なアリシアだったが、やはり家族は別問題だった。

それでも、アリシアにとっても家族に気を使ってしまう、結局言えないままだった。

そんな気持ちを引きずり続けた数日。

「姫様、どうしました？」

少し落ち込んだ風に見えたアウトロス。いつもの優しい口調で尋ねる彼に、消え入りそうな声で答えた。

「…会いたい…」

「？ 誰にです？」

「家族… 父や母や…フリージアに…」

アリシアが必死で口に出した言葉に、アウトロスは突然笑い出した。アリシアは膨れた。

「何故笑うの？」

「ああ、失礼しました。 姫様。 誰が会ってはいけないと言いました？ 傷も治ってきていますし、何より家族同士、恥ずかしがることはありませんよ。」

「そうじゃないの… そうじゃなくて… 皆私のことを思って、来てくれないのよ。」

アウトロスは少し困った顔をした。

「… それでは、お互いに遠慮しているのですか？」

「私はそんなつもりはないのに。」

アリシアは、包帯の上からそっと顔をなでた。

「私は、本当の自分を見て欲しいのに…」

今までに無く悲しそうなアリシアを目の前にして、アウトロスも切なくなっただろうか。

無意識のうちに、アウトロスの手のひらが彼女の頬に触れた。

治療している時とは違った感触を、アリシアも感じた。

不思議と抗う気持ちにはならなかった。むしろ、嬉しいと感じていた。

家族とは…

アウトロスは、7日に1度程、状況を報告に行っていた。

今まで敢えて疑問にも思わなかったことが、今度は何よりも大きな疑問となって重くのしかかった心で今回の報告に行くことになった。

ただ治療の為だけに来城したハズだった。それが医者としての自分の役目だと。

それが何故か、違う感情が生まれていた。アウトロスに、アリシアに対する患者とは違う情が生まれていた。

国王ジアスを前に、いつものようにアリシアの傷の状態を報告していった。

そして目の前には表情も変えず静かに聞くジアス。

一通りの報告を終えると、ジアスは冷たく

「ごくろう。下がってよい。」

と、アウトロスを下げようとした。しかし今日のアウトロスは少し違っていた。

「国王、ひとつよろしいでしょうか？」

「何だ？」

「アリシア様は、とても寂しがっておられます。一度お会いしてみても、いかがかと…。」

「……。」

ジアスは変わらず無表情で少し黙っていた。

「…アリシア様は、皆様が自分の事を案じての事とおっしゃっておりますが…こう言うてはお気を悪くされるかも知れませんが…」

「言ってみよ。」

「私は深く事情を知っているわけではありませんが、今の状態、本当の家族の姿とは思えませぬ。何か：腫れ物に触るような対応、逃げているようにしか見えませぬ。」

ジアスの表情に変化が見えた。明らかに何かに気づかされたような驚き…。アウトロスは続けた。

「口が過ぎました：しかし、これはアリシア様の為でもあるのです。」

「アリシアの為。」

「私は、体の傷は治せても、心の傷は癒すことは出来ません。それは、家族にしか出来ないことなのです。」

「……」

ジアスは黙っていた。しばらくの間、沈黙が2人を包んだ。

アウトロスは思うことを全て言った。もうどんな処分が下ろうとも、覚悟はしていた。

「アウトロス：」

ジアスは静かに口を開いた。

「はい。」

「お前の言った事、妻とフリージアにも伝えてくれないか。私には、傷の残るアリシアに会う覚悟がまだ出来ておらんだ。国王たるもの、所詮は娘2人を持つ親。弱いと思われても仕方ない。かと言って、妻らに同じ事を伝えられる程、器用でもないのでは…。」

アウトロスは心からホッとした。国王の中にある人間としての心に触れたからだだった。

「国王。その言葉を待っておりました。そのお気持ちが大切なのです。お2人には、私から責任を持って伝えさせていただきます。」

「うむ。頼んだぞ。」

その足で、アウトロスは王妃ラビリスとフリージアの待つ部屋へと通された。

あまり接見する機会がなかった為、一目見て姉妹の似過ぎる事に驚いた。

そして、先程国王に言った自分の思いを、2人に話した。

2人はそれを受け、是非今すぐにでも会いたいと口をそろえた。「父はまだ根に持っています。あの傷が付いたのは、自分の性だとまだ：悔やんでいるのだと思います。」

フリージアもまた、自分の身代わりになったアリシアに、悔やみきれない程の思いはあった。

しかし、こうして逃げてばかり居ても進展しないことも分かっていた。そしてラビリスも、同じ気持ちだった。

アリシアも同じように戦っているのだ。

「あの子、自分の顔を誰にも見られたくないと思っていると…。」

「年頃の女性ですから、それは当たり前の気持ちです。ですが、家族まで遠巻きにしているのは、彼女はもっと離れていくばかりです。アリシア様は、本当の自分の姿を見て欲しいとおっしゃっております。」

ラビリスは心からホッとした。

「そうね。会いに行きましょう、フリージア。」

フリージアもにっこりと答えた。

「ええ。すぐにでも。」

アウトロスは心晴れて嬉々としている2人を見ながら思った。

『それは、家族が家族として生まれ変わるチャンスでもあるのです。』

アリシアの笑顔

ひとり読書をしているアリシアの部屋の扉がノックされた。

「アウトロス？ 入って。」

本を置き、扉に近づくと同時に静かに開いた。

向こうにアウトロスの優しい笑顔。その後ろからヒョコッと懐かしい顔が飛び出した。

「フリージャー！？」

アリシアの笑顔が弾けた。そして2人が手を取り合って抱き合う姿に、ゆっくりと近づく人影。

「母さまー！！」

ラビリスもまた、とても嬉しそうにアリシアを抱きしめた。

そんな3人の姿を見て、アウトロスは心の底から嬉しく思った。

アリシアの、見たことの無いほど輝く笑顔。

アウトロスは、これが一番の薬だと分かっていた。

すぐに、アリシアは部屋を出て行こうとするアウトロスに気づき呼び止めた。

「アウトロス、どこへ行くの？」

彼はゆっくり振り向き、微笑んだ。

「今日の治療はお休みです。久しぶりの再会を邪魔する権利はありません。」

「邪魔だなんて！」

アリシアは慌てた。

「そうです、治療は続けてください。私たちこそ邪魔なんてしませんから。」

ラビリスも慌てて言った。

アウトロスは両手を上げ、食って掛かろうとする3人を抑えた。

「いえいえ。ちゃんと治療は続いていますよ。3人でおしゃべりをする事が、ね。」

キョトンとする3人を残し、彼は静かに扉を閉めた。

そして、これからどこで時間をつぶそうかと思案しながら、町の中へと繰り出すのだった。

3人は菓子やお茶を広げ、つもり積もったこの一ヶ月の間の話を、時間も忘れて話し込んだ。

それはそれは、とても幸せな時間だった。

3人の心がフワフワと温かくなり、軽くなり、今まであったモヤモヤが次々と消えていく感じを覚えた。

「この分だと、顔の傷も治りが早い気がするわ。」

笑って話すアリシアの顔半分はまだ包帯が巻かれていたが、そんなことはもはや気にもしていなかった。

フリージアが、ティーカップを片手に言った。

「綺麗になったら、キホクにも早く見せてあげたいわね。全く、

どこを旅しているのやら。」

「キホク…！」

アリシアの心にキホクの姿が返り咲いた。

すさみ切ってこの国を離れ、もう二度と帰らないと誓って闇に生きる覚悟をしていた自分を当ても無く探し、国へ…家族のもとへ帰る気持ちにさせてくれたキホク。

そして、どこへともなく旅立ってしまったキホク。

約束だけを残して…。

別れる間際、アリシアはキホクのもとから消えるように離れた。そうしないと、前に進めないと思ったからだった。

返事はしていなかった。だから、あの約束がまだ生きている

のか分からなかった。

でも、これだけは感じていた。

「キホクに会いたい。」

キホクと別れてから、半年が経とうとしていた。

「どうでしたか、昨日は。」

翌日、アウトロスはいつもと変わらない様子でアリシアの治療を始めた。

「ええ、とても楽しかったわ。 どっと疲れるくらい、色々と話したわ。」

アウトロスは優しい笑顔で聞いていた。

「そうですか。 良かった。 あれも立派な治療の一環です。 私たち医師は、体の傷は治せても心の傷までは治せないものなんですよ。 それを治せるのは、本人が心許せる人だけです。」

「アウトロス、その為に？」

彼はただ微笑んでいた。

「ありがとう。 本当に心が軽くなったの。 多分2人に会わなかったら、顔の傷が治ったところで、心から素直に再会できなかったわ。 本当に、あなたには感謝してる。」

「言ったでしょう、私の持ち得る全ての知識と技術で、あなたを治してみせると。」

アウトロスの手の中で、アリシアはとても安らかな顔をしていた。

医者にとって、自分の治療の成果が感じられることが、最高に幸せな事だった。

それから度々、ラベリスとフリージアと3人で、精神面での癒しも合わせての治療を続けた。

その後約3ヶ月経ってやっと、アリシアの顔から火傷の痕が消え去った。

それは奇跡的な事で、ついこの間まで陽の下を歩けないほどの傷があったとは思えないほど、すっかり綺麗な顔立ちを取り戻していた。

そして、父に会う時が来た。

完治

ジ阿斯は、久方ぶりとなる我が娘をしつかりと抱きしめた。

「よく、顔を見せてくれ。」

フリージアと瓜二つとはいえ、今この腕の中に居るのは紛れも無くアリシア。

「父さま。もう、気負いする事は無いのです。もう一度、初めからやり直しましょう。」

「アリシア、お前は強いな。」

苦笑いする父に、アリシアはからかい混じりに言った。

「父さまのおかげです。」

そして、その胸へと飛び込んでいった。そして後ろに従っていたアウトロスを見ると、

「そして、彼のおかげです。」

「そうだな。アウトロス、本当によくやってくれた。お前は最高の医者だ。何でも欲しいものを言うが良い。」

アウトロスは一礼した。

「私は一介の医師でございます。アリシア様がここまで回復されましたのも、私だけの力ではありませぬ。何より、家族というものの力は素晴らしいと逆に教えられました。それだけで私は満足なのです。他に何も求めるものなどありません。」

「アウトロス、では願いがある。」

国王は静かに言った。

「この城の専属医になつてはもらえぬか？」

それを聞いて、アリシアも続けた。

「そうよ。私もあなたになら安心して任せられるもの。」

医者として、権威ある者からそう言葉を掛けられるのは大変名

誉な事である。だがアウトロスは、少し困った顔をした。

「そう言って頂けるのは、身に余る光栄……なのですが、なにぶん私はまだ勉強中の身。私にはもったいない。」

それでも2人は引き下がらなかった。

アリシアも国王も、この感謝の思いをこれで終わりにはしたくなかった。返しきれないものを貰ったのだ。

そのうち王妃とフリージアも加わり、部屋は一気に騒がしくなった。

あまりに4人がしつこいので、アウトロスも考えた。

「では、もう少し考える時間を頂けませんか？ 今すぐに答えは出せませぬ。残して来ている弟子の事もありますし、他にも色々やらなければならぬことがあります。」

そんなこんなで騒ぎはようやく沈着し、アウトロスはひとまず帰路に着くことになった。

アウトロスの決意

治療の間借りていた部屋で荷物をまとめている所へ、アリシアが訪ねた。

「アウトロス。」

「アリシア様！　こんな埃の舞うような所へ来てはいけません。」
慌てて部屋から追い出そうとする彼をすり抜け、アリシアは部屋に入った。

「アリシア様…」

困ったような顔のアウトロスを尻目に、アリシアはだいたい片付けられている部屋を見回した。　部屋の中にただよう埃が、光を反射してキラキラ輝いていた。

「もう会えなくなるなんて、いやだからね。」

アウトロスは観念したように、そっと扉を閉めた。　そして、換気の為に窓を少し開けると、また荷物をまとめ始めた。

「もう会えないの？」

彼は無言で作業を続けた。

「私は、あなたに恩を返したいの。　何か、私に出来る事はない？」
アウトロスは、ピタッと手を止めるとアリシアを見た。

「アリシア様。　私は最初、この治療を努めるにあたって、国王と固い誓約をしました。　その内容は、普通的心情とは思えないほど冷たいものでした。」

アリシアはただ部屋に通されただけで、治療に関する事情は何一つ知らされていなかった。

「何があったの？」

「今だからお話しますが…　国王は側近のヨミを通じて、この城で見聞きしたことを何一つ口外しないようにと。　そして、アリシア

様の傷の経緯を大まかに伝えてきました。そして、アリシア様。
あなたは本当は存在しない事になっていると。わが国の姫は1
人でしかないと。」

アリシアは黙って聞いていた。

「そんなバカな話があつて良いのでしょうか？ 父親として、娘の
存在を消すなど：それを聞いた時、アリシア様には申し訳ない
のですが、国王はなんと冷たい人物かと思いました。」

アリシアは微笑んでうつむいた。

「彼は父親の前に、国を司る者。国の為に、何でもする人よ。
私はその娘。全て、承知しているわ。」

アウトロスは信じられないといった顔で首を横に振った。

「私も、自分の運命を何度恨んだ事か知れないわ。でも：私は父
の、国に対する愛も感じているの。ちよつとやり方は冷たいかも
しれないけど、不器用な父のすることですもの。」

アリシアは微笑んでアウトロスを見た。彼は驚いた顔をしてい
た。

「あなたは本当にお強い人だ。」

「色んな事があつたもの。」

フフフツと笑った。何も気負いしていない顔だった。

アウトロスはそれを見て、胸のつかえが取れたようだった。

「そうなのですね。アリシア様。では、私も覚悟を決めました。」

「？」

「この私でよければ、またこの城に帰ってきてても良いでしょうか？」
するとアリシアは疑問気に見上げた。

「父を：良く思っていないのではないの？」

「初めはそうだったのですが：」

アウトロスは、アリシアに家族を合わせる為に国王と話した時
の事を思い出していた。あの時、確かにジラスは『父親』だった。

「少しだけ、国王の父親としての心にも触れられたので、正直迷っていたのですよ。」

アリシアの顔がパツと明るくなった。

「父は難しい人かもしれないけど、尊敬出来る良い人よ。」

「はい、私ももっと勉強しなくては。」

アリシアはにっこりと微笑んだ。

「必ず帰って来てね！」

アウトロスは身辺整理をする為、故郷へと帰って行った。

必ず城へ戻ると約束をして：



アリシアの傷が完治してから約3ヶ月経とうとしていた。

相変わらずスナ国の姫は『ひとり』と公表したままだったが、

国王は2人の娘を代わる代わる公務に出しては、国の平和を乱さぬよう努めていた。

2人の娘はそんな関係を、むしろ楽しんでいるようだった。

まだ若い2人。有り余っている好奇心やスタミナは、時に母ラビリスを悩ませた。

「まあ、良いではないか。城の中でしか、2人は個人となれぬのだから。」

ジ阿斯は目を細めて2人の姿を見つめていた。

ラビリスもまた、嬉しそうに家族の姿を見つめた。

約束の丘へ

月が満ちる時。

アリシアは輕装に身を包み、ひとり城を抜け出した。

民から見れば、一国の王女が城を出たのであれば、騒ぎは必至だった。

陰から見送る国王、王妃、フリージアは心配そうにその後姿を見つめていた。

「大丈夫かしら…」

不安そうに嘆く王妃に、フリージアはにっこり笑って見せた。

「大丈夫よ。今までどんな困難も乗り越えてきた姉様に、怖いものなんてないわよ。ね、父さま。」

「ああ、そうだな、きっと大丈夫だ。あの娘なら…」

暗闇の中、月の光を頼りにアリシアは走っていた。

馬よりも、鳥よりも、アリシアは自分の足で向かいたかった。

時間は惜しかったけれど、久しぶりの『外』を体全体で感じたかったのだ。

そして、過去のしがらみを全て振り切った自分を。

生まれ変わった自分を、キホクに見て欲しかった。

着飾ったドレスや、髪型や化粧などで塗り隠された偽りの姿ではなく、本当の…本当の自分を。

「会いたい。」

ただその思いで、彼女は森の中を駆け抜けた。

一方その頃、キホクも歩みを進めていた。

体はもはや傷だらけだった。

深い眠りは、昔から取ることを許されない生活ではあったが、旅の疲れはやはり生易しいものではなかった。そして『独り』ということ。

そんな厳しさを積み重ね、自身には力がみなぎっていた。

キホクは、もう一度改めて誓うつもりだった。

「必ず守る。 命に代えても、君を。」

それぞれの思いを胸に抱え向かう丘に2人が近づく頃、陽の光が薄明かりを空に届け始めていた。

そして、丘の遥か向こうには、マタイの城が朝陽に焼けて輝きを放っていた。

2人の再会を祝福するかのように。

＞ 完 ＜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8570g/>

約束の地で会いましょう

2011年11月15日09時22分発行